

# SLAVIC-EURASIAN RESEARCH CENTER NEWS

No. 175 May 2025

## 研究の最前線

### 2025 年度夏期シンポジウム開催予告

2025 年 7 月 3 日、4 日に、スラブ・ユーラシア研究センターにて国際シンポジウムを開催いたします。テーマは、「Eurasia's Tectonic Changes: Past and Present (ユーラシアの地殻変動：過去と現在)」です。今回は、外国人招へい教員を軸に、複数の教員がそれぞれパネルの組織を担当する形で組織を進めています。第一パネルは Olena Palko 氏を中心に戦間期のポーランド・ウクライナの歴史を論じる「The Fate of Minorities in Eastern Europe in Interwar Period」、第二パネルは Samuel Hirst 氏を中心に「長い 20 世紀」の国際法と国際関係を非西欧から考える「Eurasian Approaches to International Law」、第三パネルは Edin Hajdarpašić 氏を中心に 20 世紀末のボスニア・ヘルツェゴビナの歴史とその記憶を扱う「Bosnia-Herzegovina's Past Between the Duty and the Work of Remembering」、第四パネルは Aksana Ismailbekova 氏を中心に現代の中央アジアにおける人の移動を考える「Human Mobility and Social Transformation in Central Asia」、第五パネルは Nicola Di Cosmo 氏を中心に前近代のユーラシアにおける環境史を考える「Cultivating a Fertile Field with New Tools: Interdisciplinary Approach to Long-Term Eurasia」です。ユーラシア大陸の変動の長い経過とそのパターンを、国際的に活躍する若手・中堅の研究者たちと考えていきます。シンポジウム二日目の午前中には、スラブ・ユーラシア研究センター創立 70 周年記念パネルとして、中村唯史氏、加藤美保子氏、塩谷哲史氏、中田瑞穂氏、小長谷有紀氏という各分野の気鋭の研究者をお招きして、「スラブ・ユーラシア研究の将来」と題した座談会を開催します（このセクションは日本語で行います）。どうぞご期待ください。[青島]

## ミルラン・ベクトウルスノフ特任助教が *Ab Imperio* 最優秀論文賞を受賞

ミルラン・ベクトウルスノフ特任助教が、ロシア・ソ連帝国論の分野で権威ある雑誌 *Ab Imperio* が贈る賞 *Ab Imperio Award for the best study in new imperial history and history of diversity in Northern Eurasia, up to the late twentieth century* のうち、2024 年最優秀論文賞を受賞しました。

<https://sites.google.com/view/abimperioaward/лауреаты-2024-winners>

受賞作は、同誌の第 25 巻第 1 号に掲載された、“The Rise of the ‘Lineage Proletariat’: The Soviet State’s Class Policy and Kyrgyz Lineage Society in the 1920s” です。この論文で著者が着目したのは、ソヴィエト国家とクルグズ（キルギス）人の父系リネージ（いわゆる部族や氏族）との関係です。中央アジアに初めて近代的国家形態制度を導入したものの遊牧社会の構造を根本的に変えることはできなかったロシア帝国の時代を経て、社会的・経済的大変革を目指したソ連は、クルグズ社会の中で弱い地位に置かれていたリネージをプロレタリアートの代替として取り立て、階級闘争を起こすことにより社会構造を変えようとしてきました。この政策によって弱いリネージ出身の人や集団が有力となったケースもありますが、強いリネージと弱いリネージは結びつき合っていたため、部族首領層が影響力を残す場合もありました。

ソヴィエト体制がリネージを政治的に利用しようとしたことは、結局はクルグズ人がリネージのアイデンティティとネットワークを保つことにつながったという著者の指摘は鋭く、この論文がソ連帝国論として高い評価を得たのも頷けます。また本論文は、当局側が作った資料を中心としながらも、遊牧民が口頭で伝承した系譜情報を批判的に参照して組み合わせることにより、遊牧社会内における力関係と、遊牧社会と当局の関係の多面的性格を解明しました。そこには、史料に残りにくい遊牧民の声と行動を理解したいという著者の思いが込められています。

ベクトウルスノフさんは日本学術振興会外国人特別研究員であった昨年にも、中央アジア研究の最も代表的な雑誌 *Central Asian Survey* の第 42 巻第 1 号に掲載された論文 “‘Two parts – one whole’? Kazakh–Kyrgyz relations in the making of Soviet Kyrgyzstan, 1917–24” で若手研究



論文で取り上げたスーサムル高原を眺めるミルランさん



ビシケクのクルグズ国立社会政治資料文書館にて

者向けの賞 The Irene Hilgers Memorial Prize を受賞しています。国際学術雑誌の賞を2年連続で受賞したことは大変な快挙です。

<https://globalsouth.org/the-irene-hilgers-memorial-prize/>

また、これらの論文は、ベクトゥルスノフさんが2022年度に北海道大学文学院（スラブ・ユーラシア学講座）に提出した課程博士学位論文の内容に関係するものであり、センターの大学院教育の成果でもあります。[宇山]

## 生存戦略研究 「帝国の世界秩序とその後を考える北大・UMA シンポジウム」を開催

センターは、北海道大学の戦略的国際パートナー校である米国マサチューセッツ大学アマースト校（UMass Amherst, UMA）と、3月7日、11日に「HU-UMA Symposium on Post/Imperial Political Ecosystems: How Our World Has Been Shaped（北大UMA シンポジウム 帝国の世界秩序とその後：いかに我々の世界は作られてきたのか）」を開催しました。両校は札幌農学校、マサチューセッツ農学校の時代から長く連携関係にあり、近年は研究者のジョイントアポイントメント等を経て、主として高分子工学、情報・計算機科学、農学、工学、水圏の研究連携、文書館が所有する農学校時代の資料共有等での動きが活発化しています。

昨年11月の両校の地域研究者・現代史研究者のマッチングを経て開催される運びとなった本シンポジウムには、講演者及びモデレータとして長縄、青島、ウルフ各研究員、メディア・コミュニケーション研究院のジョナサン・ブル講師、公共政策大学院の池炫周直美教授（この2人は生存戦略研究ユニットの文化・言語部門に所属）、国際連携推進本部の植村妙菜学術主任専門職、UMA ユダヤ・近東学科のデイヴィッド・メドニコフ学科長、政治学科のアンドリュー・マーチ教授、歴史学科のガレット・ワシントン准教授、アイゼンバーグ経営大学院のボフダン・プロコポヴィッチ上席講師が集いました。「アジア・中東から20世紀を再考する」、「帝国の遺産：日本帝国の終焉、国境を跨ぐ人の移動、比較の文脈」、「帝国後のウクライナ」の3つのセッションとパネルディスカッションから成る今回の会議では、20世紀における諸帝国の崩壊が今日我々の直面するグローバルな危機にまでいかに影響を与えているかを改めて考える機会となりました。

本シンポジウムには、両校の教職員と学生に加え、両国の大学教員、研究支援機関、外務省出身者、病院関係者から、インド科学技術大学、リスボン大学、イスラエルの医療機関、インドネシアの漁業関係者まで70名が参加登録し、地域を超えた関心の高さが伺えました。参加者からは、「大戦後や帝国崩壊に伴う引き揚げの

2025 Hokkaido University - University of Massachusetts Amherst  
Post/Imperial Political Ecosystems:  
**How Our World  
Has Been  
Shaped**

TIME:  
9:00-11:00 a.m. in Hokkaido (Day 1)  
8:00-10:00 a.m. in Hokkaido (Day 2)  
19:00-21:00 p.m. in Amherst

DATE:  
Day 1 Thursday 6 March in Amherst  
Friday 7 March in Hokkaido  
Day 2 Monday 10 March in Amherst  
Tuesday 11 March in Hokkaido

Organisers: Hokkaido University  
and University of Massachusetts Amherst

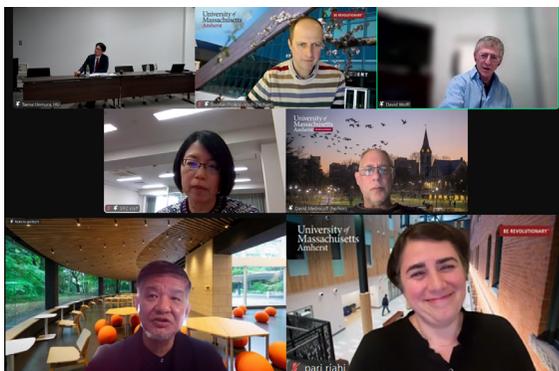
Zoom Registration | Day 1 | Day 2

CONTACTS:  
HU ■ Send all emails, Office to International Education Team (hokkyo@hokkyo.ac.jp)  
UMA ■ Ed. Mail, Office of International Communications (oic@umass.edu)  
NOTES: COVID-19 PREVALENCE: All attendees must wear masks and avoid crowded areas at both universities.  
\*No guarantee for a full refund.

状況を伝える戦争資料博物館の展示物を国際比較することで我々が学ぶべきことは何か」、「博物館のキュレーターにインタビューする場合、インタビュアーの国籍や立場が回答に影響することは否めないのではないか」、「ソ連崩壊後のロシアが西側に溶け込もうとしてきたのは意図的な策略だったのか」、「旧ソ連圏と中東の権威主義体制には先行する帝国秩序の遺産がどのように作用しているのか」、「欧米がよかれと思って行う法秩序形成の支援が中東において感情的な反発を招き、対話を難しく局面がある」等の質問や意見がありました。

北大の高橋彩理事・副学長（国際担当）からは、「スラブ・ユーラシア研究センターの生存戦略研究プラットフォームとUMAの連携により、更に多角的な視点と研究の深化を期待する」ことが述べられ、瀬戸口剛理事・副学長（研究担当）からは、「人文社会学は異分野融合研究においても重要性が認識されているが、大学コミュニティの内と外とを繋ぐ力でもある」との言がありました。UMAのカルペン・トリヴェディ国際担当副プロボストからは、「数年前にUMA研究担当執行部が国際連携方針を固める際、北大との連携に力を割くということで一致していた。両校の連携は2025年度から始まる、研究者のモビリティ支援でも広がっていく」との見立てが、人文学・芸術学研究院のパーリ・リアーヒ副研究院長（研究連携担当）からは「人の心と想いには物語る力が、人文社会学には物事を可視化し理解する力がある。今回も分野をまたぐ研究者が集まり、時間と空間を超越した思索の共有となった」との話がありました。

帝国崩壊の遺産を引きずる中東とウクライナ、そして冷戦が完全には終わっていない東アジアの日本についての議論は、通常の学会ではほとんど交わることはありません。しかし、議論を交わす中で、帝国崩壊をめぐる多層的で相反する感情が次の時代を作っていくこと、そして多様な地域から世界を眺めることで欧米中心の時代区分とは異なる複数の可能性が立ち現れることが今後の研究課題として共有されました。また、生態系というメタファーがローカルな動態を見失うことなくグローバルな概念化を行う際に有効であることも確認でき、生存戦略研究というセンターのプロジェクトの意義を考え直す機会にもなりました。今般のイベントで得たアイデアをさらに発展させるべく、ブル講師とワシントン准教授は日本、ドイツ、フランス帝国崩壊後の引揚の比較研究、メドニコフ教授と長縄研究員はロシア・中東関係史に関わる研究集会を2025年度中に北大で予定しています。[国際連携推進本部・植村妙菜、長縄]



2日目の様子：パネリストたちと瀬戸口理事（左下）  
とリアーヒ副研究院長（右下）

## 2025年度北海道大学 - メルボルン大学 合同研究ワークショップファンド採択

2022年度より、北海道大学では、メルボルン大学との国際研究連携深化のために、新規研究テーマと異分野融合研究の可能性を探る合同コンファレンスの開催、博士課程学生の共同指導の更なる促進、そして、新規研究連携を支援する合同研究ワークショップファンドを

立ちあげました。2023年度には、スラブ・ユーラシア研究センター岩下明裕及びメルボルン大学文化学部マーク・エデレのチームが「Eurasian Migrations: Past, Present, Future」というテーマで採択されていましたが、それに続き、2025年度はウクライナ研究にフォーカスした形で、スラブ・ユーラシア研究センター青島陽子及びメルボルン大学イリーナ・スクビイのチームが「War, Migration, and Identity: Exploring New Agendas for Ukrainian Studies in the Asia-Pacific Region」と題するテーマでファンドに採択されました。2025年12月にメルボルン大学で本シンポジウムを開催予定です。このシンポジウムには、スラ研からは青島陽子と野町素己の他、新しく特任助教として赴任したウクライナ言語・歴史の専門家であるイーホル・ダツェンコさん、博士課程に在籍しながら現在研究支援推進員としても活躍中のウクライナ文学専門の上村正之さんも参加します。ウクライナ研究における若手研究者の育成という意味でも、メルボルン大学との国際的な共同企画は重要な意味をもつでしょう。[青島]

## 日米緊急対話「トランプ復活とロシア・ウクライナの行方」の開催

センターの「ウクライナ及び隣接地域研究ユニット (URU)」および「国際的な生存戦略研究プラットフォームの構築」では、東京大学先端科学技術研究センター・創発戦略研究オープンラボ (ROLES) との共催により、3月6日 14:00～16:00にセンター大会議室において、日米緊急対話「トランプ復活とロシア・ウクライナの行方」を開催しました。米国よりロシア政治・外交研究の第



小泉氏（一番左）とキメッジ氏（一番右）

一人者であるマイケル・キメッジ教授（ウィルソン・センター・ケナン研究所所長）が来日した機会を捉えた企画でした。日本側からは、軍事面を中心にロシアを鋭く斬る論客として活躍の著しい小泉悠・東京大学先端科学技術研究センター准教授が登壇。センターの服部がモデレーターを務めました。

今年1月に米国で第二次トランプ政権が成立して以来、トランプ大統領の言動に世界が大きく翻弄される状態が続いていますが、ロシア・ウクライナ情勢はその最たるものです。対ウクライナ支援および対ロシア制裁の姿勢を堅持し、G7の結束を重視していたバイデン前政権とは打って変わって、トランプ政権は早期停戦のためにはウクライナ支援の停止やロシアとの妥協も辞さない構えです。このように情勢が急変する中で、今回の日米緊急対話においては、キメッジ教授がバイデン政権からトランプ政権への移行に伴う米国の対応の変化につき報告を行い、小泉准教授はロシア・ウクライナ戦争の構図と基本的視点につき改めて問題提起を行いました。その上で、フロアおよびオンライン参加者を交えて、活発な討論が行われました。

日米を代表する論客がタイムリーなテーマにつき議論する企画だけでなく、リアルタイムでは対面・リモートを合わせて300人を超える参加者がありました。また、後日 You-

Tube にアップした動画 (<https://www.youtube.com/watch?v=97hUwDSOImg>) は、4 月上旬現在ですすでに 3 万回近く再生されています。[服部]

## 特別連続セミナー 「2.24 から 3 年を経たスラブ・ユーラシア世界」の開催

センターの「ウクライナ及び隣接地域研究ユニット (URU)」では、2 月 14 日と 17 日の 2 日間にわたり、特別連続セミナー「2.24 から 3 年を経たスラブ・ユーラシア世界」を全面リモートで開催いたしました。

2022 年 2 月 24 日にロシアがウクライナへの全面軍事侵攻を開始してから、3 年が経過しました。米トランプ政権による強引な停戦の試みはあるものの、4 月上旬現在も激しい戦闘や空爆は収束しておらず、紛争解決の見通しは立っていません。そして、この戦争は当事国のみならず、スラブ・ユーラシア世界全体を大きく揺さぶっています。

そこで今回の特別連続セミナーでは、まず 2 月 14 日の第 1 部「周辺国からの視点」において、「アゼルバイジャンとアルメニア：もう一つの戦争をめぐる」(国末憲人・東京大学先端科学技術研究センター特任教授)、「中欧の小国開放経済とウクライナ戦争：スロヴァキアの『親ロシア』のコンテクスト」(松澤祐介・静岡大学グローバル共創科学部准教授)、「ロシアの巻き返し戦略とモルドヴァ・ルーマニア」(六鹿茂夫・霞山会常任理事、静岡県立大学名誉教授) という 3 本の報告をお届けしました。

2 月 17 日の第 2 部「戦争で変わるロシアとウクライナ」では、「ロシア大国化構想から規範毀損型サバイバルへ」(山添博史・防衛研究所地域研究部米欧ロシア研究室長)、「戦時下 3 年間のウクライナ国内情勢」(田中祐真・独立行政法人国際協力機構 (JICA) 中東・欧州部ウクライナ支援室)、「ロシア・ウクライナ経済のレジリエンス」(服部倫卓・北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター教授) と、こちらも 3 本の報告を披露しました。

6 本の報告は、リアルタイムでは計 1000 人以上によって視聴され、後日 YouTube にアップしたアーカイブ動画は計 1 万回以上再生されています。[服部]



6 本の講演動画はいずれもアーカイブ視聴が可能

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLU2forBYK2xfHLj38SYfaeUioN8cyGDmg>

## 人間文化研究機構グローバル地域研究推進事業 東ユーラシア研究プロジェクト (EES) 2024 年度全体集会開催報告

2025年1月25日に、センターにて、人間文化研究機構グローバル地域研究推進事業東ユーラシア研究プロジェクト (EES) 2024 年度全体集会を開催した。形式は、対面とオンラインの併用であった。会議では、東ユーラシア研究プロジェクト全体および各拠点の目的と計画・成果について情報共有・意見交換を行い、今後の相互交流や成果発信のあり方について議論を行った。

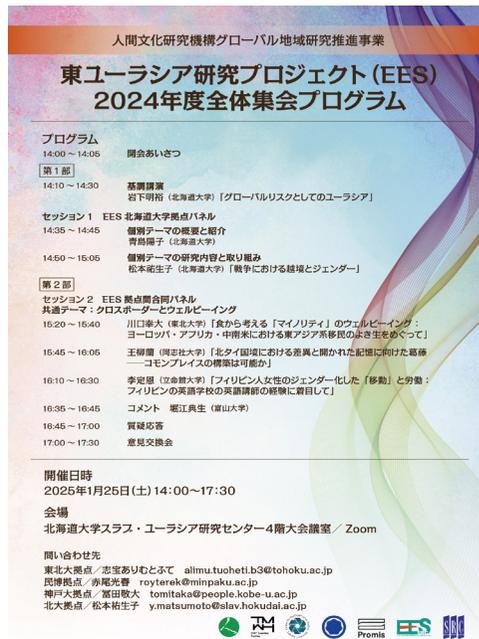
全体集会は、(1) 基調講演、(2) セッション 1 EES 北海道大学拠点パネル、(3) セッション 2 拠点間パネルの 3 つのプログラムにより実施した。

(1) 基調講演では、EES 北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター拠点長で、長崎大学グローバルリスク研究センターのセンター長でもある岩下明裕研究員が「グローバルリスクとしてのユーラシア」と題して、東ユーラシアのグローバルリスクについて包括的な理解を提示した。さらに、移民とジェンダーに関する論文集の刊行に向けて、戦争・紛争などをキーワードとして、北大拠点内で活発かつ緻密な議論を行っていることも報告された。

(2) セッション 1 「EES 北海道大学拠点パネル」では、個別テーマの概要と紹介を青島陽子 (北海道大学) が行い、国際連携に積極的に取り組んでいることを示した。個別テーマの研究内容と取り組みとして、松本祐生子 (北海道大学) が「戦争における越境とジェンダー」と題して、第二次世界大戦終結 80 年を意識した報告を行った。

(3) セッション 2 「クロスボーダーとウェルビーイング」では、東北大拠点の川口幸大 (東北大) が「食から考える「マイノリティ」のウェルビーイング：ヨーロッパ・アフリカ・中南米における東アジア系移民のよき生をめぐって」、民博拠点の王柳蘭 (同志社大学) が「北タイ国境における差異と開かれた記憶に向けた葛藤：コモンプレイスの構築は可能か」、神戸大拠点の李定恩 (立命館大学) が「フィリピン人女性のジェンダー化した「移動」と労働：フィリピンの英語学校の英語講師の経験に着目して」というテーマで報告し、北大拠点の堀江典生 (富山大学) がコメントを行った。本セッションでは、北大拠点の個別テーマである越境とジェンダーをテーマとして、身体的・物理的な空間の越境に限らず、文化的あるいはオンライン空間での越境も含め、移動がもたらした人々の生活への影響を広く検討することを目指した。EES の共通テーマであるウェルビーイングに関する理論的整理から、個別の事例の間の対照・比較まで、バランスの取れた報告と議論が行われた。

全体集会には、対面で 51 名、オンラインで 9 名が参加して、大変盛況であった。翌日の若手研究者集会にも、対面で 47 名、オンラインで 5 名が参加して、二日間にわたり活発な議論がなされた。[松本 (祐)]



人間文化研究機構グローバル地域研究推進事業

### 東ユーラシア研究プロジェクト (EES) 2024年度全体集会プログラム

プログラム	開会あいさつ
14:00 ~ 14:05	
<b>第 1 部</b>	
14:10 ~ 14:30	基調講演 岩下明裕 (北海道大学) 「グローバルリスクとしてのユーラシア」
14:35 ~ 14:45	セッション 1 EES 北海道大学拠点パネル 個別テーマの概要と紹介 青島陽子 (北海道大学)
14:50 ~ 15:05	個別テーマの研究内容と取り組み 松本祐生子 (北海道大学) 「戦争における越境とジェンダー」
<b>第 2 部</b>	
15:10 ~ 15:20	セッション 2 EES 拠点間合演パネル 共通テーマ：クロスボーダーとウェルビーイング
15:20 ~ 15:40	川口幸大 (東北大) 「食から考える「マイノリティ」のウェルビーイング：ヨーロッパ・アフリカ・中南米における東アジア系移民のよき生をめぐって」
15:45 ~ 16:05	王柳蘭 (同志社大学) 「北タイ国境における差異と開かれた記憶に向けた葛藤——コモンプレイスの構築は可能か」
16:10 ~ 16:30	李定恩 (立命館大学) 「フィリピン人女性のジェンダー化した「移動」と労働：フィリピンの英語学校の英語講師の経験に着目して」
16:35 ~ 16:45	コメント：堀江典生 (富山大学)
16:45 ~ 17:00	質疑応答
17:00 ~ 17:30	意見交換会

開催日時  
2025年1月25日(土) 14:00~17:30

会場  
北海道大学スラヴ・ユーラシア研究センター4階大会議室 / Zoom

問い合わせ先  
東北大拠点 / 志室ありむとよて alimu.tuoheti.1.b3@tohoku.ac.jp  
民博拠点 / 赤尾光替 royterek@minpaku.ac.jp  
神戸大拠点 / 富田敬大 tomitaka@people.kobe-u.ac.jp  
北大拠点 / 松本祐生子 y.matsumoto@slav.hokudai.ac.jp







## NPI/SRC 共催シンポジウム「4年目を迎えようとしている ウクライナ戦争とロシア・旧ソ連諸国」開催される

センターは2025年2月23日に、公益財団法人中曽根康弘世界平和研究所（中曽根平和研究所、NPI）との共催で、標記のシンポジウムを開きました。同研究所は現在、「東アジア国際問題の内在的考察：地域研究から見る朝鮮半島・台湾海峡問題」という大きなプロジェクトを、東アジア研究者だけではなく多様な専門の研究者を交えて遂行していますが、そのうち旧ソ連地域を担当する「ロシア研究会」がこのシンポジウムを企画しました。

当日は、ロシア・ウクライナ戦争の和平の困難さや、戦時下のロシアの軍事・内政・外交・情報発信、中央アジア・コーカサス地域の動向などを多角的に検討しました。大学、シンクタンク、メディアなどに所属し、外交との関わりも深い研究者たちが集まることによって、現在の旧ソ連地域が抱える困難な課題に正面から向き合う議論ができたと思います。日曜日にもかかわらず対面会場の大会議室で参加した大学院生たちがいたほか、オンラインでもたくさんの方の質問が寄せられ、ウクライナ侵攻の本格的開始から3年が経っても関心が薄れていないことが窺えました。[宇山]

プログラム：

### 第1部：ウクライナ戦争下でのロシアの内政・外交

真野森作（毎日新聞社外信部副部長・論説研究員、NPI 協力研究員）

「戦時下ロシアの対日発信：その態様・内容の初歩的検討」

長谷川雄之（防衛省防衛研究所主任研究官、NPI 協力研究員）

「軍事安全保障からみたウクライナ戦争の現在（いま）」

中馬瑞貴（ROTOBO ロシア NIS 経済研究所主任、NPI 協力研究員）[オンライン]

「ロシアの外交と内政のリンク」

### 第2部：ウクライナ戦争と旧ソ連地域

宇山智彦（北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター教授、NPI 客員研究員）

「ウクライナ侵攻開始後の中央アジア諸国と中国の関係」

ダヴィド・ゴギナシュヴィリ（ジョージア大使館分析官、慶應義塾大学 SFC 研究所  
上席所員、NPI 協力研究員）

「ジョージア政治情勢の多角的分析」

廣瀬陽子（慶應義塾大学総合政策学部教授、NPI 上席研究員）

「ウクライナが求める和平の理想と現実：国内外の実情を踏まえて」

## 共同研究員

2025年度からセンター共同研究員になっていただく方々は以下の通りです（各カテゴリの中では五十音順）。2024年度から2年任期の共同研究員については、センターニュース第171号をご参照ください。[編集部]

**共同研究員（一般）**

任期：2025年4月1日～2027年3月31日（2年間）

秋山徹（北海道教育大釧路校）、油本真理（法政大）、阿部賢一（東京大）、池田嘉郎（東京大）、磯貝真澄（千葉大）、岩本和久（札幌大）、上垣彰（西南学院大）、植田暁（日本貿易振興機構）、海野典子（大阪大）、大串敦（慶應義塾大）、大野成樹（旭川市立大）、岡野要（神戸市外国語大）、小川佐和子（北大文学研究院）、小椋彩（北大文学研究院）、小澤実（立教大）、貝澤哉（早稲田大）、加藤有子（名古屋外国語大）、加藤博文（北大アイヌ・先住民研究センター）、加藤美保子（広島市立大）、梶さやか（岩手大）、金山浩司（九州大）、神竹喜重子（一橋大）、亀山郁夫（名古屋外国語大）、ガブランカペタノヴィッチ＝レジッチ・ヤスミナ、河村彩（東京科学大）、北井聡子（大阪大）、木村護郎クリストフ（上智大）、久保慶一（早稲田大）、小松久男（東洋文庫）、小森宏美（早稲田大）、金野雄五（北星学園大）、左近幸村（九州大）、佐藤圭史（北海道医療大）、佐原徹哉（明治大）、塩川伸明（東京大）、塩谷哲史（筑波大）、重松尚（日本学術振興会）、篠原琢（東京外国語大）、下里俊行（上越教育大）、白岩孝行（北大低温科学研究所）、醍醐龍馬（大阪大）、高尾千津子（早稲田大）、高倉浩樹（東北大）、高橋沙奈美（九州大）、高橋美野梨（北海学園大）、立花優（北大大学院教育推進機構）、巽由樹子（東京外国語大）、田畑伸一郎（北大）、田畑朋子、地田徹朗（名古屋外国語大）、月村太郎（同志社大）、鶴見太郎（東京大）、徳永昌弘（関西大）、鳥飼将雅（大阪大）、鳥山祐介（東京大）、中井遼（東京大）、中澤敦夫（富山大）、中田瑞穂（明治学院大）、中地美枝（北星学園大）、中村唯史（京都大）、沼野充義（東京大）、野田仁（東京外国語大）、野中進（埼玉大）、野部公一（専修大）、乗松亨平（東京大）、濱本真実（大阪公立大）、林忠行（北大/京都女子大）、番場俊（新潟大）、日臺健雄（和光大）、平田武（東北大）、平松潤奈（東京大）、廣瀬陽子（慶應義塾大）、樋渡雅人（東京大）、福嶋千穂（東京外国語大）、福田宏（成城大）、藤澤潤（神戸大）、藤本健太郎（小樽商科大）、本田晃子（岡山大）、前田弘毅（東京都立大）、松寄英也（津田塾大）、松澤祐介（静岡大）、松下隆志（岩手大）、松戸清裕（北海学園大）、松本彩花（北大メディア・コミュニケーション研究院）、松本祐生子（お茶の水女子大）、溝口修平（法政大）、道上真有（新潟大）、宮崎悠（成蹊大）、望月哲男（北大）、森下嘉之（茨城大）、八木君人（早稲田大）、湯浅剛（上智大）、横手慎二（慶應義塾大）、横山恒子オリガ（カリフォルニア大ロサンゼルス校）、吉村貴之（早稲田大）、米岡大輔（中京大）

任期：2025年4月1日～2026年3月31日（1年間）

井上暁子（熊本大）、佐々木史郎（国立アイヌ民族博物館）、李優大（東海大）、高柳聡子（早稲田大）、榎本真奈美（同志社大）、大茂矢由佳（埼玉大）、菊間史織（尚美学園大）、金沢友緒（電気通信大）

**生存戦略共同研究員**

任期：2025年4月1日～2027年3月31日（2年間）

伊藤融（防衛大）、小沼孝博（東北学院大）、川島真（東京大）、黒木英充（東京外国語大）、澤江史子（上智大）、田村容子（北大文学研究院）、山根聡（大阪大）

任期：2025年4月1日～2026年3月31日（1年間）

吉田修（広島大）

## 境界研究共同研究員

任期：2025年4月1日～2027年3月31日（2年間）

安溪貴子、石井明（東京大）、伊豆芳人、今井宏平（日本貿易振興機構）、今野泰三（中京大）、小川玲子（千葉大）、郝洪芳（ミシガン大）、北川眞也（三重大）、北村嘉恵（北大教育学研究院）、金成浩（琉球大）、小池康仁（一般社団法人と那国フォーラム）、樽本英樹（早稲田大）、池畑周直美（北大公共政策大学院）、中居良文（学習院大）、中山大将（北大経済学研究院）、ブル・ジョナサン・エドワード（北大高等教育推進機構）、前田幸男（創価大）、益尾知佐子（九州大）、舩田佳弘（北海商科大）、山崎幸治（北大アイヌ・先住民研究センター）

任期：2025年4月1日～2026年3月31日（1年間）

田村将人（国立アイヌ民族博物館）

## 専任・助教・非常勤研究員セミナー

年度末を迎え、計5回の研究員セミナーが開催されました。

### 専任研究員セミナー

2025年2月5日 ウルフ・ディビッド

報告：Post-Soviet Russia and China: Tightening the Dragon's Grip

コメンテータ：横手慎二（慶應義塾大学名誉教授）

このペーパーはケンブリッジ大学から公刊が予定されている出版物のチャプターのひとつで、1980年代から現在までの中露関係を分析したものです。この時期ソ連崩壊をはさみながらも両国は協力関係を築いてきましたが、その傾向が2000年代には石油をめぐる経済協力を通じて顕著になり、2014年のクリミア併合とウクライナ東部での戦争開始がガスパイプライン建設につながると後戻りできない段階に至りました。2022年2月のウクライナ全面侵攻以降、ロシアの中国への依存は決定的になったと本論は論じます。このパートナーシップはプーチンと習近平の緊密な関係に裏付けられ、両者が実質的に制限を受けずに権力をふるうことを支えてきたものの、中国を主とした対等でない二国関係にはリスクも潜んでいるという指摘で論は結ばれています。

コメンテータからは、ロシアが欧米と中国の間で揺れてきたことを正しく指摘していること、日・中・露三国の枠組みから東アジアの国際関係を分析していることが高く評価されました。中露の緊張や不安定化要因についてはより一層の分析が求められるとともに、反米だったがロシアの孤立は避けたプリアコフ外相とプーチン政権との断絶についての指摘や、安倍政権の対露政策との関係についてのコメントがありました。

フロアからは、プーチンと習近平の個人的な関係にフォーカスする手法について関心が集まり、トランプや安倍との関係との比較などが提起されました。また経済（石油・天然ガス）が政治に与える影響の大きさという観点から、シベリアのパイプラインや北極域でのLNGに関する議論が行われました。二国間関係については、専門的な見地からより微細な時期区分が提起されたほか、アメリカ、中央アジアや北朝鮮、9/11以降の反イスラム情勢等によ

る影響についても幅広く議論されました。話題はオリンピックとの関係など政治の儀礼性や表象にも及び、世界が耳目をそばだてる二国間の問題の重要性を改めて実感させる会となりました。[安達]

2025年2月26日 諫早庸一

報告：フレグ・ウルスの崩壊：「14世紀の危機」の解明に向けて

コメンテータ：船田善之（広島大学）

このペーパーは論集『モンゴル帝国史研究へのいざない』に掲載予定の論考で、モンゴル帝国の崩壊の局面に光を当てています。長足の進歩を遂げているモンゴル帝国史研究においても、4ウルスのいずれもが解体していく局面については、史料の残存状況が良くないため依然として研究の余地が多く残っています。これに対して本論は、最初に政権が瓦解した西アジアのフレグ・ウルスに焦点を当て、このウルスが生態環境の変化とどのように向き合いつつ崩壊に至ったのか、その過程をいくつかの重要な転機に注目して具体的に明らかにしています。文理協働研究の成果を紹介しつつ多分野・多世代が協力する共同研究への呼びかけともなっており、「危機」の研究を「未来」へ開こうと鼓舞する内容でした。

コメンテータからは、まずモンゴル史の文脈で海外の同世代の研究者と緊密なネットワークを築きつつ、日本での世代間のギャップを埋めるものとして報告者の研究活動が位置づけられた後、このペーパーについては環境史の最新の成果を紹介し分野外の研究者や次世代を担う学生を惹きつけるという困難なミッションへの挑戦が高く評価されました。その一方、挙げられている各要因の相互作用が見えにくく崩壊過程の理解が難しくなっていることが指摘されるとともに、データ抽出の恣意性や環境決定論という古気候データの援用に対する批判にどう応答するのか、モンゴル帝国のまとまりや統一の核をどのように理解するかといったスケールの大きな問いが提出されました。

フロアも触発され、気候データに関する質問や、「崩壊学」というモデル設定と実証研究の緊張関係に関する指摘が出されたほか、崩壊過程をめぐる史実・地理の確認、経済やムスリム統治の影響を問うものまで、「崩壊」とは何かをめぐって空中戦も寝技も交えた縦横無尽な議論が行われました。センターでの文理協働研究への関心の高まりがはっきり示された会となりました。[安達]

2025年3月27日 野町素己

報告：How was the Serbian Language Studied during the Tito-Stalin Split in the USSR? Evidence from the Archive of Samuil Borisovič Bernštejn

コメンテータ：Robert D. Greenberg（University of Newcastle, Australia）

ソ連の南スラブ言語学は、マール主義の残した禍根が残る中でチトーとスターリンの対立の影響を受け、1953年のスターリンの死によって終結を見るまで暗黒時代を迎えます。そうした過酷な状況下で、ソ連でスラブ語研究の復興を一手に引き受けていたモスクワ大学教授のサムイル・ベルンシュテインは、専門のブルガリア語以外に、セルビア語・クロアチア語研究・教育も存続させるべく試みていました。このペーパーは、その具体的な研究・教育内容を明らかにするため、モスクワ市中央国立文書館に保管されているモスクワ大学で1952-1953年に行われたセルビア語史の未刊行講義録や関連資料と、自身が執筆し、ソ連

教育省から発行された複数の「セルビア語史の教育プログラム」を比較分析し、当該領域における研究・教育の理念と実践について分析しました。その際、ベルンシュテインが敬意を持ち、しかもセルビア語史では避けて通れない権威、また大セルビア主義の言語面における論客として意見を異にしていたユーゴスラビアのアレクサンダル・ベリッチの業績や位置づけを、上記の政治的状況の中でベルンシュテインがどのような本音と建前で行っていたかも検討しました。また、セルビア学士院文書館ベリッチ・フォンド、野町氏個人が所有するベルンシュテインの未刊行関連資料、関係者インタビューなど幅広い資料で裏づけがなされました。当該テーマは従来のスラブ語史では論じられておらず、論点と資料の双方で価値のある貢献と言えます。

今回のコメンテータは FVFP 教員としてセンターにも滞在したロバート・グリーンバーグ教授（ニューカッスル大学）でした。コメンテータからは、言語史・社会言語学・方言学と言語学以外の要素を組み合わせた研究としてペーパーに高い評価が与えられました。そのような多分野性に応じて議論も、クロアチア語やマケドニア語に対するベルンシュテインの見方、セルビア語・クロアチア語は一体であるというベリッチの見解に対する反応、ベルンシュテインが実際にカバーしていた領域との乖離などから、ベリッチとの個人的な関係や正教が彼のセルビア語研究に及ぼした影響に至るまで多岐に渡りました。

フロアからは、ベルンシュテインの音韻論・形態論研究、恩師であったアフアナシイ・セリシチェフあるいは同僚・学生との関係や影響、ベリッチのベルンシュテインに対する態度などについての質問から、ベルンシュテインの南スラブ語研究とソ連やユーゴスラビアの言語政策との関連、マル主義の再評価、環境史的な視点から見た言語研究の可能性まで幅広く、活発な議論が行われました。なお、本論文は米国の査読付き研究誌 *Balkanistica* に掲載予定とのことです。[安達]

#### 非常勤研究員セミナー

2025年3月13日 松本彩花

報告：第五章 主権独裁と民主主義：民主主義論の展開（一九二三－一九二六年）『独裁と喝采：カール・シュミット〈民主主義〉論の成立』

コメンテータ：青島陽子（SRC）

このペーパーは博士論文を基にした単著に収録予定のもので、カール・シュミットが『現代議会主義の精神史的地位』で展開した民主主義論の構想過程を、独自の資料調査の成果を利用しながら歴史的文脈に位置づけて解明するものです。1922年の『政治神学』で民主主義における国家的統一は不可能であると考えていたシュミットは、議会主義論の初版（1923年）では、民主主義における国家的統一の達成と維持という課題に積極的に取り組む姿勢へと転じています。そして民主主義における本質的な論点を人民の意志という擬制の形成であるとして、その形成手段をもつ者による主権独裁の論理を適用し、「独裁は民主主義の決定的な対立物ではない」という命題を導き出すに至るのです。こうした変容の背景として、ヴァイマル共和国が分裂と内戦の危機の中で、民主主義において国家的統一をいかに維持するかという課題に直面していたことが指摘されます。さらに1926年の第2版序文では、民主主義の本質として「同質性」概念や「異質な者の排除」という契機が登場し、後に国際関係の文脈で適用されていくと論は結ばれています。

コメンテータからは、大衆民主主義の時代の政治思想史に、用語・概念の普及・流通と成立のコンテクストという二点から取り組んだものとして、その現代的意義や、ロシア研究にとっての有用性を高く評価するコメントがありました。また「民主主義」「主権独裁と委任独裁」「人民の意志」「同一化と同質性」といったシュミット概念や、詩的にすら思えるレトリックについての深堀りが行われました。

フロアからの関心も高く、上述した民主主義と独裁に関連する諸概念についての議論が盛り上がったほか、暴力や情動の問題の位置づけ、スターリン期のソ連や治安維持法時代の日本との比較や同時代的影響関係の有無、第一次大戦後の少数民族保護の国際的取り組みとの関係など、今日的な問題意識に裏打ちされた骨太な質疑応答が行われ、会の終了後も議論は尽きませんでした。[安達]

2025年3月21日 藤本健太郎

報告：極東共和国とソヴィエトロシアの対日政策：緩衝国政策の「成功」と「失敗」

コメンテータ：兎内勇津流（SRC）

このペーパーは博士論文を基に出版する際その章のひとつとして予定されています。1921年から22年までのソヴィエト政権の対日外交を扱った研究において、緩衝国家としての極東共和国の役割が長く着目されてきた中で、本論はソヴィエトロシアと極東共和国がそれぞれ別の目的を持って対日政策を立案していた可能性を示唆する先行研究に基づきながら、ソヴィエトロシアがこの時期の対日外交において何を目的とし、そしてその目的は達成されたのかを明らかにするものです。この時期のソヴィエトロシアの対日政策における、対米交渉と、極東共和国とソヴィエトロシアそれぞれによる対日交渉、という三つの要素を析出しつつそれらの相互関連を検証することで、1922年までの対日外交において、モスクワの意図しない結果が生じていたこと、また1923年初頭には日ソ関係においてモスクワが不安定な立場に立っていたと結論づけています。

コメンテータからは、極東の革命・内戦、シベリア出兵史研究の盛り上がりや、ロシアでの文書館調査と研究交流が難しくなっている現状、近代日本政治外交史研究の展開といった最新の研究動向を踏まえながら、先行研究との差異、史実とその解釈をめぐって丁寧なコメントが行われました。

フロアからも先行研究に対しての位置づけの確認があったほか、帝国論的な視点からの議論が多く提出されました。極東共和国の国家としての地位をめぐるモスクワ・共和国・日本それぞれの認識とそれに基づく戦略を問う質問、ロシア領内に一時的に外国資本や技術を誘致し、経済発展と外貨獲得を図るコンセッション（利権供与）が極東共和国で外交カードとして使われていた事実を周縁における新経済政策の実験だったのではないかとする問い、極東共和国の自律性や現地の利益に注目するコメントがあったほか、現地資料の扱いについての質問も見られました。センターでの極東アジア研究の蓄積と高い関心を裏付ける会となりました。[安達]

## 研究会活動

センターニュース 174 号以降、センターが主催・共催した諸研究会活動は以下の通りです（国際シンポジウムを除く）。[編集部]

**2 月 4 日 International Research Platform for Survival Strategies: Online Seminar**  
Piro Rexhepi (University College London) “White Enclosures: Racial Capitalism & Coloniality Along the Balkan Route”

**2 月 6 日 共同利用・共同研究拠点公募事業「プロジェクト型」成果報告会** 桑原尚子（岩手県立大学）「権威主義体制下の『法』とその『合理性』—旧ソ連諸国におけるグローバルな法規範の移植をめぐる『闘争』を手掛かりとして—:総論」、ウミリデノブ・アリシエル（名古屋経済大学）「事例研究：ウズベキスタン」、中村真咲（名古屋経済大学）「事例研究：モンゴル」

**2 月 7 日 客員研究員セミナー** 塩谷哲史（筑波大学）「ポサドニック号事件をめぐるいくつかの問題点」

**2 月 10 日 UBRJ/CGR 実社会のための共創研究セミナー** 山田良介（九州国際大学）「ダークツーリズムを超えて：北海道と九州を結ぶ」

**2 月 10 日 生存戦略研究共催セミナー** 宇山智彦（SRC）「ペレストロイカ期中央アジアの民族問題：ソ連中央の対応がもたらした遠心力と『共和国政治』の浮上」

**2 月 12 日 SRC Seminar** Peter Rutland (Wesleyan University) “Nationalism and Climate Change”

**2 月 12 日 Dialogue with Chinese scholars on China-Russia relations** Feng Yujun (Peking University) “The Global and Regional Impacts of The Russia-Ukraine Conflict”; Guan Guihai (Peking University) “The Russia-Ukraine Conflict and Its Impacts on Russian Domestic Politics”; Yang Cheng (Shanghai International Studies University) “The Russia-China-Central Asian Triangle Relations”; Iwashita Akihiro (SRC) “Recent China-Russia Relations and Northeast Asia”; David Wolff (SRC) “Russia as China's Most Important Other: Historical Perspectives”; Liu Xu (Renmin University of China) “The Economic Sanctions and the Reaction of Foreign (Non-Russian) Companies”; Liu Qian (China University of Petroleum) “The China-Russian Cooperation on the Polar Silk Road and Its Prospects”

**2 月 13 日 SRC 客員研究員セミナー** Diana Kudaibergenova (University College London / SRC) “Conceptualizing on or with? Everyday Authoritarianism in Central Asia”

**2月13日 北海道中央ユーラシア研究会第150回例会** 中井健太（大阪大学大学院博士前期課程）「モンゴル人民共和国における自国史・自民族史記述とロシア東洋学：G.E. グルムグルジマイロの歴史記述と「モンゴル」の過去への遡及」

**2月14日・17日 特別連続セミナー** 「2.24から3年を経たスラブ・ユーラシア世界」第1部「周辺国からの視点」国末憲人（東京大学）「アゼルバイジャンとアルメニア：もう一つの戦争をめぐる」、松澤祐介（静岡大学）「中欧の小国開放経済とウクライナ戦争：スロヴァキアの『親ロシア』のコンテクスト」、六鹿茂夫（霞山会 常任理事、静岡県立大学）「ロシアの巻き返し戦略とモルドヴァ・ルーマニア」；第2部「戦争で変わるロシアとウクライナ」山添博史（防衛研究所）「ロシア大国化構想から規範毀損型サバイバルへ」、田中祐真（独立行政法人国際協力機構）「戦時下3年間のウクライナ国内情勢」、服部倫卓（SRC）「ロシア・ウクライナ経済のレジリエンス」

**2月14日 アイランドリスク・対馬研究会第1回（長崎）** 石田徹（島根県立大学）「訳官使 もう一つの日朝交流」

**2月23日 NPI/SRC 共催シンポジウム** 「4年目を迎えようとしているウクライナ戦争とロシア・旧ソ連諸国」第1部「ウクライナ戦争下でのロシアの内政・外交」真野森作（毎日新聞社外信部副部長・論説研究員、NPI 協力研究員）「戦時下ロシアの対日発信：その態様・内容の初歩的検討」、長谷川雄之（防衛省防衛研究所、NPI 協力研究員）「軍事安全保障からみたウクライナ戦争の現在（いま）」、中馬瑞貴（一般社団法人ROTOBO ロシア NIS 経済研究所主任、NPI 協力研究員）「ロシアの外交と内政のリンク」；第2部「ウクライナ戦争と旧ソ連地域」宇山智彦（SRC、NPI 客員研究員）「ウクライナ侵攻開始後の中央アジア諸国と中国の関係」、ダヴィド・ゴギナシュヴィリ（ジョージア大使館分析官、慶應義塾大学 SFC 研究所上席所員、NPI 協力研究員）「ジョージア政治情勢の多角的分析」、廣瀬陽子（慶應義塾大学、NPI 上席研究員）「ウクライナが求める和平の理想と現実：国内外の実情を踏まえて」

**2月27日 共同研究班「国家の生存戦略に関する共同研究」報告会** 小森宏美（早稲田大学）「1990年代前半のエストニア・ロシア関係」、吉村貴之（早稲田大学）「アルメニアと『権威主義化ドミノ』」

**2月28日 生存戦略研究セミナー** Abel Polese (Dublin City University) “Trying (and perhaps failing) to understand development assistance and social innovation in Central Asia”

**3月3日 北海道中央ユーラシア研究会懇談会** 廣田千恵子（日本学術振興会 /SRC）、カプディル・アイナグル（刺繍作家）「カザフ手工芸の変遷：刺繍作家 X. アイナグル氏の活動の軌跡を辿る」

**3月3日 共同利用・共同拠点（共同研究班）報告会** 熊野直樹（九州大学）「乾岔子島事件がもたらした動揺とソ連の対日態度」、花田智之（防衛省防衛研究所）「戦間期ドイツのセキュリティゼーション（安全保障化）：『ボリシェヴィズム（共産主義）の危険』」

**3月6日 日米緊急対話** 「トランプ復活とロシア・ウクライナの行方」 マイケル・キメツジ（ウィルソン・センターケナン研究所）、小泉悠（東京大学）

**3月7日・11日 HU-UMA Symposium** “Post/Imperial Political Ecosystems: How Our World Has Been Shaped” Session 1: The Twentieth Century Reconceptualised in Asia and the Middle East, Norihiro Naganawa (SRC), David Mednicoff (University of Massachusetts Amherst), Andrew March (University of Massachusetts Amherst); Session 2: Post-imperial Legacies: Japan's End of Empire, Transnational Migration, and Comparative Contexts, Jonathan Bull (Hokkaido University), Garrett Washington (University of Massachusetts Amherst); Session 3: Ukraine in Post-imperial Politics, Bogdan Prokopovych (University of Massachusetts Amherst), Yoko Aoshima (SRC)

**3月8日 科研研究会** 『14世紀の危機』についての文理協働研究：この4年間を振り返って」 第1部 宇野伸浩（広島修道大学）「14世紀の中国の気候変動と自然災害：とくに1310–40年代を中心に」、中塚武（名古屋大学）「温暖で湿潤な『気候異常期』としての1320年代と現代の類似性」、大貫俊夫（東京都立大学）「13–14世紀ドイツにおける気候変動と社会不安：修道院文書・年代記・古気候プロキシの史料横断分析の試み」；第2部 四日市康博（立教大学）「帝国の形成・分裂と気候変動」、西村陽子（東洋大学）「唐末の動乱と気候変動：古気候プロキシから見た東部ユーラシアの激動期」、諫早庸一（SRC）「フレグ・ウルスの農業危機：1319年反乱再訪」

**3月10日 北海道で考える北東アジア国際情勢シンポジウム2025** 「新局面を迎えたウクライナ戦争の北東アジアへの影響：日本を取り巻く安全保障環境を考える」 兵頭慎治（防衛省防衛研究所）「国際情勢の変化と北東アジアの安全保障環境への影響」、岩下明裕（SRC）「国際情勢の変化と日本を取り巻く領土問題への影響」

**3月10日 Seminar (Tokyo)** Vytautas Kuokštis (Vilnius University/SRC) “The Political Economy of the Lithuanian Growth Puzzle”

**3月10日 サイモン・モリソン教授講演会** Simon Morrison (Princeton University) “Russia's Teacher, Japan's Student; Japan's Teacher, Russia's Student: How Two Great Musical Cultures Informed Each Other in the 19th Century, and Beyond”

**3月11日 北海道スラブ研究会** 菊間史織（SRC 共同研究員）「セルゲイ・プロコフィエフの音楽：東方に縁のある素材たち」

**3月17日 北極域研究セミナー（東京）** 「サハ共和国が問いかけるロシア北極域経済の変動」 横川和穂（神奈川大学）「サハ共和国における財政と住民生活」、服部倫卓（SRC）「制裁下のサハ共和国ダイヤモンド産業の行方」、成田大樹（東京大学）「変わりゆく気候の下でのサハ共和国先住民の家計と食」

**3月17日 Survival Strategies Study Seminar** Vytautas Kuokštis (Vilnius University/SRC)  
“The Political Economy of Lithuanian Long-Run Economic Growth in Comparative Perspective”

**3月19日 EES/CGR 実社会のための共創研究セミナー** 田村慶子(北九州市立大学)「ジェンダーとセクシュアリティをめぐるアジアの政治」

**3月21日 スラブ・ユーラシア研究センター公開講演会** 野田仁(東京外国語大学 / SRC)「カザフ・ハン国の歴史：15世紀から20世紀まで」

**3月25日 共同利用・共同研究拠点公募事業「プロジェクト型」成果報告会** 大串敦(慶應義塾大学)、福田宏(成城大学)「旧ソ連東欧政治研究の展開の一側面：オーラル・ヒストリーを通じて」

**3月26日 SRC Seminar** Arbakhan Magomedov (Russian State University for the Humanities / Tohoku University) “The Russian–Ukrainian Conflict and the Birth of the “post-February” Arctic: seven ways that re-created the Far North”

**3月28日 「大国主義の現代史」 科研研究会 (東京)** 今野茂充(東洋英和女学院大学)「大国中心主義と中小国の役割：第一次世界大戦の開戦原因研究を事例に」、鈴木隆(大東文化大学)「習近平の政治家像とリーダーシップ、台湾問題をめぐる政治認識」

**4月10日 Survival Strategy Study Seminar** Emmanuel Garnier (Université Paris-Saclay / Institut de France) “Siberian Indigenous Peoples Facing Environmental Changes 17th–20th Centuries”

**4月11日 北海道中央ユーラシア研究会 昼食懇談会「春の海外調査報告会」** 橋爪真「スロヴェニア現地調査報告：第二次世界大戦の記憶と政党政治」、鈴木恵理「アルマトウ、アスタナ、ビシュケク3都市視察：政変の跡を探して」、林浩平「南東欧放浪記、ブルガリアで資料を探す新参者のために」

## 人事の動き

### 研究員・事務職員の異動

ヤスミナ ガブランカペタノヴィッチ=レジッチ 助教 2025年2月28日(退職)

野田 仁 教授 2025年3月31日(東京外国語大学からセンターへのクロスアポイントメントを退職)

松本 祐生子 特任助教 2025年3月31日(退職)

藤本 健太郎 非常勤研究員 2025年3月31日(退職)

松本 彩花 非常勤研究員 2025年3月31日(退職)

アントネンコ ヴィクトリア 学術研究員 2025年3月31日(退職)

上村 正之 学術研究員 2025年3月31日(退職)

笹谷 めぐみ 研究支援推進員 2025年3月31日(退職)

山本 祐巳 主任 2025年3月31日(転出)

呉人 徳司 教授 2025年4月1日(東京外国語大学からセンターへのクロスアポイントメントに採用)

ダツェンコ イーホル 特任助教 2025年4月1日(採用)

ベクトゥルスノフ ミルラン 特任助教 2025年4月1日(採用)

アントネンコ ヴィクトリア 非常勤研究員 2025年4月1日(採用)

堀田 主 非常勤研究員 2025年4月1日(採用)

塚原 稜央 学術研究員 2025年4月1日(採用)

上村 正之 研究支援推進員 2025年4月1日(採用)

重金 千賀子 主任 2025年4月1日(転入)

### 2025年度の客員教授・准教授

公募していました2025年度客員教授・准教授は審査の結果、次の6名の方々をお願いすることになりました。[編集部]

#### 客員教授

氏名	所属	研究テーマ
Aaron Cohen	Department of History, California State University	The Fall and Rise of Monumental Propaganda: Aesthetic Gigantism, Marx and Lenin Monuments, and Localizing Centrality in the Soviet Union, 1922-1985

金 成浩	琉球大学大学院 地域共創研究科	ゴルバチョフ外交と '88 ソウル・オリンピック
塩谷 昌史	大阪公立大学経済学部	国際関係におけるロシア国勢調査（1897年）

## 客員准教授

氏名	所属	研究テーマ
Pavel Shabley	Kostanay branch of Chelyabinsk State University	Sufism in the Qazaq Steppe under Russian Rule: Between Imperial Nescience and Local Knowledge
Kirill Postoutenko	Helsinki University	From "Rootless Cosmopolitans" to "Ukro-Nazis": Mechanisms and Scenarios of Imperial Othering in 19th-21th Century Russia
内田 州	早稲田大学 地域・地域間研究機構	ボーダースタディーズ：ジョージアの非承認国家問題と EU 加盟プロセスの相互作用

## 追悼：外川継男先生

センターの発展の礎を築くうえで、組織面でも国際研究交流の面でも顕著な功勞のあった外川継男先生の追悼文を、元センター長の望月哲男先生と、元文学研究科長の栗生澤猛夫先生に書いていただきました。

## 外川継男先生と SRC

望月 哲男（北海道大学名誉教授）

SRC がまだ「北海道大学法学部附属スラブ研究施設」という名の組織だった 1960 年代から四半世紀あまりも研究員を務められた外川継男先生が、本年 1 月 3 日、満 90 歳で亡くなりました。

ソ連の有人宇宙飛行船ヴォストーク 1 号の大気圏外への飛行が衝撃を生んだ頃からペレストロイカの時代まで、SRC の活動を牽引し、組織の発展に多大な貢献をされた我々の大先輩であり、筆者も先生が SRC を去られる前の 1 年間新任として薫陶を



1986 年、真駒内にて（右から筆者、外川先生）

受けた身として、直接・間接に伝わってくるその研究者としての感覚の鋭さ、視野の広さ、またあくまでもリベラルで洒落なお人柄に、強い憧れと敬意を覚えてきました。もちろんご専門の近代ロシア思想史や日ロ文化関係史の領域の著作からもたくさん学ばせていただきましたが、その幅広いお仕事の実価については一文学研究者の狭い視野からはとても語りつくせません。ここでは、先生の SRC での活動についてごく簡単に整理します。また、元 SRC 情報資料部の松田潤氏のご協力を得て作成した「外川継男先生著作一覧」をウェブサイト<sup>1</sup>に別掲することで、先生への感謝と哀悼のしるしとさせていただきます。学者・教育者としての先生のプロフィールについては、同じ歴史学がご専門で外川先生とも SRC とも大変縁の深い、元北大文学研究科長の栗生澤猛夫先生に語っていただきます。

外川先生は 1957 年に東京大学文学部西洋史学科を卒業されたのち、北海道大学大学院文学研究科に進学、当時スラブ研究施設主任であった鳥山成人助教授のもとで研究生生活に入りました。博士課程在学中の 60 年に、SRC の誕生に深いかかわりがあったロックフェラー財団フェローとしてカリフォルニア大学バークレー校に留学した後、翌 61 年に法学部附属スラブ研究施設助手に就任。その後パリ第 4 大学附属スラヴ研究所への留学（66 年、フラン

1 [https://src-h.slav.hokudai.ac.jp/center/essay/2025042303\\_j.html](https://src-h.slav.hokudai.ac.jp/center/essay/2025042303_j.html)

ス政府給付生)をへて69年にスラブ研究施設助教授となり、翌71年から75年9月まで、施設長を務めました(73年教授に昇進)。76年のワルシャワ大学での研修、77年のレニングラード・ロシア文学研究所への研究出張などを経て、77年10月に再度施設長に就任。これ以前から前施設長の故木村汎教授、故出かず子助教授、伊東孝之助教授らとともに推し進めてきた施設のセンター化の構想が実って、78年春に「学内共同教育研究施設スラブ研究センター」が設立され、外川先生が81年3月まで初代センター長を務めました。

この時期、外川センター長のもとでSRCの活動は大きく広がりました。78年には外国人研究員プログラムが開始され、79年には「スラブ研究センター研究報告シリーズ」、「スラブ研究センターニュース」が創刊、54年から行われていた夏期・冬期研究報告会も、年2度の「総合シンポジウム」という形に進化発展しました。これらは形を変えながら現在まで継続されているSRCの活動の根幹です。79年にはさらに「情報資料部」が新設され、資料収集と情報サービスの軸となっていきます。センターのステイタスはいまだ学内共同利用のための施設でしたが、内外の研究界との連携に向けて開かれた活動の形は現在のセンターにそのままつながるもので、外川先生はまさにそうしたセンターの発展のシナリオを作り、今日のSRCへの進化を入口で支えた先輩たちの中心にいた存在として、顕彰されるべきでしょう。

外川先生ご自身が留学や滞在研究の経験をもとに培ったアメリカ、フランス、ポーランド、ロシアなどのスラブ研究者たちとの親密な関係がSRCの国際化に果たした役割は顕著で、初期の外国人研究員や国際シンポジウム参加者の編成にもその様子がうかがえますし、センターが83年にパリ第3新ソルボンヌ大学国立東洋語東洋文化研究所ロシア・ユーラシア研究センターと最初の交流協定を結んだことも、同じ背景から説明されると思います。

もちろんSRCに対する外川先生のご貢献は組織運営や改革・新機軸といった観点からだけでは説明できない、より本質的な研究活動にかかわるもので、それは、例えば紀要(当時)『スラヴ研究』に次々に発表されたゲルツェン、チャアダーエフを核としたロシア近代思想研究の成果が実証しています。地域研究はもちろん学際的な世界であり、先生の歴史・思想史研究も、政治学、経済学、国際関係論、言語・文学などの諸学の専門家の仕事と隣接し、相互に作用しあいながら遂行されたものですが、そうした環境下で(おそらくそうした環境下でこそ)成し遂げられた息の長い研究の営みの記録を見ると、外川先生とSRCが、いわば互いを育て高めあう、幸福な関係にあったであろうことがうかがえます。

歴史学が専門の外川先生はご自身の活動でSRCに貢献されたばかりでなく、SRCの活動の歴史家としても貴重な仕事を残されています。「スラブ研究施設二十年の歩み」(『スラヴ研究』20号、1975年)、「木村彰一教授と北大のスラブ研究」(『スラヴ研究』33号、1986年)などの文章は、以上略述したようなSRC草創期の歴史を知るうえで、またとない資料です。またのちに当センターニュースに連載された回想的エッセイ「スラ研の思い出1-12」(『スラブ研究センターニュース』75-86号、1998-2001年)は、先生が在籍されていた当時の専任や客員はもちろん、事務官や非常勤職員諸氏、関連の学内諸部局の方々のプロフィールまで生き生きと盛り込んだ、たくさんの顔を持ったSRC史で、70年代までの北大の歴史資料としても、また日本のスラブ地域研究史の一局面の記録としても、大変興味深いものです。

上述のような組織の進化にともなって一段と激務化したセンター長職を終えた後の外川先生は、再度ご自身の活動の翼を広げ、83年にはワルシャワ大学日本語学科で授業を担当、85年6月～8月には北大水産学部忍路丸(おしよるまる)に乗ってベーリング海経由アラ

スカへ周航という、実に興味深い経験をされています。先生のご関心が日露関係へと移ってきたことの反映でしょうか、何よりも分野や手法の枠にとらわれず、自分の目で何でも見てやろうという、地域研究的歴史家としての本領を見る思いがします。

先生は87年に上智大学外国語学部へ転出されましたが、その後も96年9月までセンター共同研究員をつとめられ、またいつからか札幌市南区のマンションで夏を過ごされるようになったので、先生とSRCとの関係は、以降も長く続きました。個人的にも、南北線澄川駅付近の喫茶店でお目にかかってお話を伺ったり、夏の研究会やシンポジウムで文学研究科の故灰谷慶三教授や栗生澤猛夫教授の隣に外川先生のお顔を見たりするのが、とても楽しみでした。

以上大変簡単なながら外川先生のSRCでの活動を概観させていただきました。先生のご恩への深い感謝とともに、本稿を終えます。

---

## 外川継男先生を偲んで

栗生澤 猛夫（北海道大学名誉教授）

本2025年1月3日、外川継男先生が虚血性心不全のため亡くなられた。満91歳の誕生日を迎えられる3日前のことであった。

先生は上智大学を退職された後、2度も癌手術をされた。ご令室郁子様をはじめ周りには皆心配したが、その後も十数年は、夏の間札幌で過ごされ、私などもその都度お目にかかったので、お元気になられたことを喜んでいました。ご子息、健一氏によれば、晩年の先生は「散策を楽しみ、川辺のベンチで鳥のさえずりを耳にしたり、大好きな本屋で至福の時を過ごしたり」の、また家庭でも「穏やかで笑いの絶えない」のんびりとした生活であったという。

私が外川先生に最初にお目にかかったのは1971年のことである。その年の春、私は一橋大学大学院修士課程を修了し、北海道大学文学研究科博士課程に進学、鳥山成人教授の指導を仰ぐべく札幌の地に足を踏み入れた。そのとき、すでにゲルツェンの『向こう岸から』の邦訳で有名であった外川先生にすっかりお世話になった。会ったこともない一介の院生に対し、先生は、引っ越し荷物（布団と若干の衣類、それにダンボール30箱ほどの本）を、当時のスラブ研究施設のご自身の研究室宛てに送ることをお許しになったのである。これがお世話になった最初である。私はそのとき施設のことも、そこで先生がどのような役職についておられるのかも、よく知らなかった。正直なところ、そのようなことには頭が回らなかった。先生ご自身が東京大学文学部（西洋史）を卒業された後、北大文学研究科大学院に進学されたご経験から、頼る者のない貧乏院生にとって、所属先を変えることや引っ越しがいかに大変であるかを理解されておられたのだと思う。当時の施設は小なりとはいえ（専任研究員はおそらく3名だけであった）、先生はすでに施設長をなされていたが、私がそれを知ったのは、大分後になってからのことである。

スラブ研究施設はその後、1978年にセンターとなり（先生が初代センター長に就任された）、目覚ましい発展を遂げることになるが、万事につけ感度の鈍い私にとっては、いわば草創期の牧歌的なスラブは理想的な居場所であり、その時代の先生はたいへんありがたい指導者であったように思う。先生はその段階ですでにアメリカ、フランスへの留学を果たされ

ており、ロシア語はもとより英仏語も自在な研究者として、我々のよき先達であられたのである。私が北大院生になった翌年には、ポーランドがご専門のドイツ帰りの伊東孝之先生も助教授として赴任され、我々院生（当時のスラブは研究施設であり、固有の院生はいなかったが）にとっては、この両先生は巨大な、しかしお二人のお人柄ゆえに適度な、刺激的存在であった。私などが潰れもせずに、研究は楽しいと思いながら続けられたのは、草創期スラブの先生方のおかげであったと言って過言ではない。

外川先生のお仕事で、このころ私がかもっとも刺激を受けたのは、上記ゲルツェンの『向こう岸から』もそうであったが、なによりもチャアダーエフの「哲学書簡」のご翻訳であった（『スラヴ研究』6-9号、1962-65年）。フランス語原文から訳された第一書簡（第二～第八書簡は当時まだ露語訳しか刊行されておらず、先生も露語から和訳された）の次のような文言、すなわち、ロシアは「過去も未来もなしに、完全な停滞の中にあつた」、「我々〔ロシア人〕は人類全体の一部を構成するというよりも、世界に大きな教訓を与えるためだけに存在する」、「ヨーロッパのすべての民族は、時代のなかを手に手を携えて進んできた……、我が国においては全人類的教育を新たに始めなければならない」などは、私に「ロシアとヨーロッパ」というテーマの重大性を改めて認識させるものであり、ロシアにはそもそも「歴史」がないとするチャアダーエフの慨嘆は、私にとってもまさに「闇夜にひびいた一発の銃声」のようであったのである。

先生はそのころゲルツェンを中心にツルゲーネフやバクーニンのことを研究対象にされていたが、それは論文「二つの論争」に結実し（『スラヴ研究』15、17号、1971年、73年）、さらに同1973年に、御茶ノ水書房から単行本『ゲルツェンとロシア社会』として刊行された。いつのことであったか、先生は我々院生のためのいわば私的外川ゼミで（その終了後にどこか居酒屋へ行くのが楽しみであった）、ゲルツェンがツルゲーネフとの論争を通してロシア農民とその共同体の重要性に目覚め、それが「ロシア的社會主義」理論の構築につながったと、話されたのであった。

これと並行して左近毅さんと共に編まれた『バクーニン著作集』（全六冊、白水社、1973-74年）も忘れ難い。私も短編のいくつかを翻訳するよう求められたが、先生ご自身が「鞭のゲルマン帝国と社会革命」、「マルクスとの個人的関係」、「革命家の教理問答書」、「ドイツと国家共産主義」などの大部の論文を訳出された。先生がまだ30歳代後半のお仕事で、施設の運営管理をこなしながらの、精力的な研究活動には圧倒される思いであった。

先生はその後1978年に『ロシアとソ連邦』（講談社版『世界の歴史18』）を出版された。40歳代前半のお仕事で、通史というのは、個別研究を究め老境に入った大家のなしうる仕事と思っていた私にとっては、いささか衝撃であった。しかしながら外川版「ロシア史」は、ロシアとその歴史が日本人にとってもつ意味についての深い洞察に満ちており、バランスのとれた構成と読みやすさもあって、日本の多くの読者に歓迎されたのであった。本書において先生は、まず序章で「ロシアと日本の近代化」の類似点、相違点について考察した後、近代の章で「ピョートルと日本」、「エカテリーナと大黒屋光太夫」を、さらに19世紀末から20世紀にかけての箇所では、「ロシアの極東進出」（最初の訪日使節レザーノフ、ゴロヴニンと高田屋嘉兵衛、プチャーチン、日露親親条約、千島・樺太交換条約）、「日露戦争と1905年革命」を取り上げ、引き続きロシア革命後の「日本のシベリア出兵」を概観した後、最終章を「第二次世界大戦後の日ソ関係と北方領土問題」にあてて本書全体を締めくくら

れたのである。まさに日本人のためのロシア史を先生は物されたのであった。後に先生ご自身が記されているところによると、先生の東大時代の恩師、西洋古典古代史の権威村川堅太郎教授がこれを読み、すべての頁に書き込みまでしていたという（「ある歴史学者の死」1992年、『サビタの花』2007年所収）。

その後の先生の研究対象は、次第にロシア近代史プロパーから日露関係史へと移っていったが、その萌芽はすでに上記『ロシアとソ連邦』に明瞭に現れていたのである。先生のご関心のこの分野への移動は、ちょうど先生が施設のセンター昇格の大仕事を終えられ、センター長の職も他の方々に譲られて、上智大学へ移られていくのと時期的に重なっていたように思う。私は日露関係史研究の必要性を十分理解しているつもりではあるが、自分の能力からして、そこまで広げることはできないと観念していたので、正直言って、この面での先生のお仕事を手に取ることはあまりなかった。ただ先生の「日露・日ソ関係の特徴」（『日露200年』所収、1993年）は別である。これはいかにも先生らしい講演で、私は何か蒙を啓かれたような気がしたのである。

先生はこの講演において、両国関係の特徴を三点指摘している。その第一の特徴として先生があげられたのは、両国の長い確執の歴史において、被害をこうむった人々（千島アイヌや中国、朝鮮半島の住民）が多数いたことである。これをまずもって認識しておく必要があることを先生は力説されたのである。通常国家間の関係の問題においては、国際関係や地政学的要因が主に取り上げられ、政治や経済、軍事に焦点が合わされるが、その重要性を十分に認識されながらも、先生はあくまでもそこに居住する人々のことを忘れてはならないと説いたのである。人間的アプローチを選ばれたと言ってよいと思う。先生のあげる第二の特徴も興味深い。両国間のコミュニケーション技術がきわめて貧弱であるという事実である。両国が長い関係のなかで、常に行き違いや誤解に悩まされてきたことが指摘される。言語や文学、文化の地道な研究・教育の重要性を先生は誰よりも強く認識されていた。第三は、両国間の関係には常に第三国が強い影響を与え、また介入したことである。最初期（江戸時代）はオランダであり、次に英国（18世紀後半から19世紀）、そして現代においては米国である。日本人は多くの場合、これらの国々の眼鏡を通してロシアを見てきたというのである。私は日本におけるロシア史研究が（といっても私の場合、中近世史に限定されるが）、これまで、通常は意識することなく、米国やヨーロッパ諸国、とりわけドイツのその強い影響下にあったと思っている。これを「バイアス」として認識しない限り、我々の研究には偏りが生じざるを得ない。これを避けるため私は可能な限り視野を広く保ち、「事実」に即した研究を志ざしているが（もっともそれが容易でないことは言うまでもない）、これは外川先生の姿勢



1982年8月、小樽—ナホトカ姉妹都市記念旅行  
（外川先生、筆者）

に通じるものがあると知って、心強く感じたのであった。先生の両国関係史に対する見方はあくまでも人間中心のであったように思う。

晩年の先生の主要な研究対象は、とくにラーゲリ（公式的には矯正労働収容所、実際は強制収容所といてよい）体験者フランス人ジャック・ロッシ氏と深く結びついている。コミンテルンの活動家であったロッシ氏は、1937年（本人が28歳の時）にモスクワに召喚、逮捕され、そのまま21年間もラーゲリに入れられていたが、「釈放」後も自由の身となったわけではなく、様々な苦労を重ねた後の1985年に（本人76歳のとき）ようやく、フランスに戻ることができたという。先生は、ロッシ氏といわばラーゲリ仲間であった内藤操上智大学教授（前北大教授、ペンネーム内村剛介氏）の仲介でその知己を得て、彼のラーゲリ体験記などの紹介に取り組みされることになったのである。

その最初が、ロッシ著『さまざまな生の断片』（成文社、1996年）の翻訳である。これは「ソ連強制収容所の20年」と副題にあるように、収容所での過酷な体験を約50のエピソードとして綴ったものである。先生は、自己の体験を悲劇として誇大に描いたり、ソ連当局の非人間的扱いを声高に糾弾したりすることのまったくない著者の人柄に大いに打たれたようである。先生のロッシ氏紹介の次の仕事は、2004年の『ラーゲリのフランス人』（恵雅堂、サルドとの共著）の翻訳である。これは3部全35章からなる大部の自伝で、その第二部（全24章）が収容所生活の記述に宛てられている。

ロッシ氏のこれらの著作は、1997年に恵雅堂から出たその『ラーゲリ（強制収容所）註解事典』（内村剛介監修、梶浦智吉、麻田恭一訳）とともに、それまで我々がソルジェニーツィンやギンズブルグ（『明るい夜、暗い昼』）、シャラーモフ（『コルイマ物語』）などから得てきた、ソヴィエトの強制収容所の実態とソヴィエト社会そのものの在り方に関する知識を、大幅に補充、増進させるものであった。外川先生の晩年のお仕事の意義はきわめて大きいと言わなければならない。

これとの関連で、先生がその間に取り組みされたヴェルト「人民に敵対する国家」の紹介も重要である。これはクルトワ編の『共産党黒書』（全五部）の第一部「ソ連篇」の翻訳で、2001年にこれも恵雅堂から出版された（その後2016年にちくま学芸文庫に入る）。これはフランス歴史学のよき伝統の上に立つニコラ・ヴェルトが、ソヴィエト社会の根底にある「暴力」という事象の展開の全史を、丁寧にたどった大論文で（仏語原文250頁）、一つのすぐれたソヴィエト・ロシア史論と言って過言でない。先生は当初これを翻訳することをためらったようである。内容の深刻さと大部の著作であることが大きな要因と推測される。しかしロッシ氏がこれを推薦してきたこともあって、最終的には相当の覚悟をもってこれに取り組みされた。糖尿病に起因する体の不調と戦いながら完成されたと伺っている。先生は「解説」のなかで、ナチズムと共産主義とを区別せずに論じる編者クルトワのいささか乱暴なソヴィエト論に批判を加えつつ、ヴェルトの研究を高く評価しているが、先生のこの立場には私も大いに賛同したところであった。

さて本拙文の冒頭に、私が最初に先生にお世話になった時のことを書いた。しかしうまでもなくそれだけであったわけではない。そこで last but not least、その他の忘れてならないことについても、最後に思いつくままに記しておきたい。

私は進学してすぐに、生まれてはじめて激しい目の痛みで悩まされた。私は中学の時以来眼鏡を着用しており、視力の低下には常に悩まされていたが、痛みに見舞われたのはこの時

が初めてであった。進学したばかりなのに、一時は研究の断念と退学を考えた。それを知った先生は、その場で大学病院に電話をかけて下さり、私は治療を受けることができた。痛みの原因は特定されず、したがって有効な治療法もみつからず、その後も10年ほどは痛みと付き合いを余儀なくされたが、原因不明ということは、とくに深刻な病気でもないと感じただけで、随分と救われた気分になった。先生はまた何度も私（ども）をお宅に招いてくださり（いやむしろ



2002年10月、柳川にて（筆者、外川先生）

らから押しかけたと言った方が正確かもしれない）、そのたびに奥様の手料理をごちそうになった。今にして思えば、あまりに無遠慮だったと汗顔の至りである。先生と奥様、お子様方にはお赦しを請う以外にない。拙宅を建てる時も、先生がお口添えをしてくださった。栗生澤さん、家というものは傾かずにまっすぐ立っていれば、よしというぐらいの気持ちでいた方がいいですよ、と引き渡しの時に先生がおっしゃったことをよく覚えている。そのほか、私が1974年にドイツへ留学する際には、業績（わずかしかなかった）と履歴書を置いていくように言ってくださった。公募があれば、出すこともできるかもしれないというのである。私はそのおかげで、留学後時を置かず小樽商科大学に赴任することができたのであった。その意味でも先生は掛け値なしに私の恩人であった。御礼の言葉もない。

外川先生、安らかにお休みください。ありがとうございました。

## 大津定美先生のご逝去

田畑 伸一郎（北海道大学名誉教授）

日本におけるソ連・ロシア経済研究を牽引され、センターの活動にも多大な貢献をされた大津定美先生が2025年1月10日に86歳で亡くなられました。

先生は、1938年に北海道美唄市に生まれ、東京外国語大学ロシア語科を卒業後、京都大学大学院経済学研究科に進まれました。その後、龍谷大学、神戸大学、大阪産業大学で教鞭を取られました。特にソ連・ロシアの労働問題の研究では、日本の第一人者として活躍され、1988年に出された『現代ソ連の労働市場』（日本評論社）でサントリー学芸賞を受賞されました。社会主義においては労働市場は存在しないという議論が優勢であったなかで、ソ連の労働市場の実態を分析した同書は、ソ連社会主義が最終段階に入る時期に、研究の新たな方向性を示すものでした。



センターでは、1990～1991年度に客員教授を務められたほか、1995～1997年度に実施された重点領域研究『スラブ・ユーラシアの変動－自存と共存の条件－』にも大きく貢献されました。この重点領域研究では、旧ソ連・東欧の移行経済の計画研究班として、ミクロ、マクロ、国際関係の3つの班が設けられ、大津先生は、そのなかの「経済システム転換期における企業の動態分析」のなかで、主導的な役割を果たされました。ロシアにおいてようやくフィールドワークができるようになった時期でしたが、先生はまさにその先駆者でした。それには、優れた語学力だけでなく、相手の懐を開かせるような何かがあったように思われました。その過程で、多くのロシアの研究者とも交流を深められました。

常にミクロの実証研究を志向された先生は、マクロの統計研究にのめり込む私に対して、「マクロだけでは経済は何も分からないよ」とよく叱責されました。しかし、その一方で、私の書いたものにもよく目を通してくださり、暖かく評価してくださいました。個人的なことをさらに記せば、大津先生夫妻とは、1989年にモスクワのカニコヴォの科学アカデミーのアパートで数カ月間隣り合わせの部屋に住むことになり、生まれたばかりの息子を孫のようにかわいがっていただきました。

大津先生は、1975年頃ロンドンのオックスフォード大学に留学され、ポーランド出身のウォジミエシ・ブルスの教えも受けたと聞いています<sup>1</sup>。先生は、こうしたことがきっかけになっているかと思いますが、欧米の研究者との交流も密接に行ってこられて、この面でも、日本の旧ソ連・東欧経済研究者の先駆けになられたように思います。2007年には比較経済

1 W. ブルス(大津定美訳)『社会化と政治体制:東欧社会主義のダイナミズム』(新評論,1982年)があります。

体制学会の代表幹事になりましたが、先生がこの学会に入られたのは 1993 年のことで、丁度、会の名称が社会主義経済学会から変更されたときでした。

先生については、ミャンマーとの関わりについても触れないわけにはいかないでしょう。ロンドン留学中に奥様の典子さんともどもアウンサン・スーチー氏と知り合いになり、その後、家族ぐるみの付き合いを続けられました。ミャンマーの情勢が緊迫化するなかで、先生は小規模水力発電の技術をミャンマーに伝える事業に奔走されました。とてもまねのできないことです。

ご冥福をお祈りいたします。

## 学界短信

### 科学研究会『14 世紀の危機』についての文理協働研究 報告記

2021 年から 4 年にわたり実施してきた科研プロジェクト『14 世紀の危機』についての文理協働研究もこの 3 月で終了となります。この科研の総括をすべく、2025 年 3 月 8 日に、最終研究会を開催いたしました。プログラムは当初、以下のように計画されていました。

諫早庸一 (SRC) 「はじめに：『14 世紀の危機』についての文理協働研究」

〈第 1 部〉

宇野伸浩 (広島修道大学) 「14 世紀の中国の気候変動と自然災害：とくに 1310 ~ 40 年代を中心に」

中塚武 (名古屋大学) 「温暖で湿潤な「気候異常期」としての 1320 年代と現代の類似性」

大貫俊夫 (東京都立大学) 「13 ~ 14 世紀ドイツにおける気候変動と社会不安：修道院文書・年代記・古気候プロキシの史料横断分析の試み」

〈第 2 部〉

四日市康博 (立教大学) 「帝国の形成・分裂と気候変動」

西村陽子 (東洋大学) 「唐末の動乱と気候変動：古気候プロキシから見た東部ユーラシアの激動期」

諫早庸一 (SRC) 「フレグ・ウルスの農業危機：1319 年反乱再訪」

〈ラウンドテーブル+総合討論〉

『14 世紀の危機』研究：我々は何を明らかにしたのか」

ただし、当日は大貫氏が急遽欠席となりましたので、その枠で諫早が黒死病研究のレビューを行いました。

まずは諫早が「はじめに」において、当科研の 4 年間の歩みをイベントのポスターとともに振り返りました。ただ実のところ「14 世紀の危機」研究はそれ以前、諫早が 2019 年に本センターに着任した年にいただいた北大の若手研究加速事業から始まっており、それ

を發展させた翌 2020 年の、中塚氏を PI とする本センターの共同研究プロジェクトが、この科研の基礎となりました。その視座は、「中世温暖期」から「小氷期」への生態環境の移行期にあたる 14 世紀に起きた、1) 気候変動、2) 社会動乱、3) 疫病流行からなる「複合危機」の全体像を解明することにあり、これまではヨーロッパ史の枠組みでのみ考えられてきたこの危機を、ユーラシアの多地



研究会のようす

域を支配していたモンゴル帝国（1206～1368年）を中心に、広くアフロ・ユーラシア規模で考察することが目的でした。このプロジェクトのハイライトである国際シンポジウム「崩壊の局面：アフロ・ユーラシアから「14世紀の危機」を思考する」（2023年7月13～14日）ではこのプロジェクトの成果を、世界の一線でこの問題について考えている研究者たちと議論することができ、結果として、1) 地域的な多様性、2) 時代的な多様性、3) 史料の語り方、4) サイクルへの注視、5) あらたな時代・勢力の胎動、という5つの論点を引き出すことができました。こうした前提のもと、この危機について、科研メンバーの各々が今考えていることを報告するのが今回の研究会でした。

まずは宇野氏の報告「14世紀の中国の気候変動と自然災害」です。過去1000年間でもっとも気候変動の激しかった14世紀について、宇野氏は元朝治下の中国において発生した自然災害と気候変動との関係を考察します。宇野氏は『元史』『宋史』や『永樂大典』といった史料を、クック氏が年輪データに基づいて算定した東アジア夏季平均気温のデータや台湾の年輪セルロースからの酸素同位体比から得られた——南中国与有意な地域相関を有する——台湾の相対湿度データおよび中塚氏による年輪セルロースの酸素同位体比から得られた中部日本の相対湿度のデータと組み合わせることでデータベースを作成しました。文献データからの災害数のカウントのなかで、13～14世紀の中国において人間社会に最も大きなダメージを与えた自然災害は洪水であったことが分かり、その最初のピークは1290年前後にあります。古気候データからは、この時期に気温の低下と降水量の増加が起きていたことが分かります。その次に洪水と飢饉がともに増加するのは、1310年代後半から20年代にかけてです。この時期は先のピークにも見られた気温と相対湿度の関係が変化し、温暖かつ湿潤な気象状況が発生していました。こうした異常気象は中国に多くの洪水と飢饉を引き起こすのです。ただし文献データはこの社会の災害対応をも記しています。元朝は、南宋征服によって獲得した江南の穀倉地帯から大量の穀物を華北に輸送することで、同地の食糧不足・飢饉をしのぎ、1368年まで王朝を維持するのです。

次の報告は中塚氏の「温暖で湿潤な『気候異常期』としての1320年代と現代の類似性」です。中塚氏は報告の冒頭で、これまでの古気候学は、例えば周期性の議論に関して、樹木年輪やサンゴ年輪のように個々の専門家が自らの専門とするプロキシにのみ着目して議論を進めてきた現状を述べ、プロキシ相互間の架橋の大事さを指摘します。プロキシから知りうる指標についても、もちろん相対湿度と気温がその代表格なわけですが、例えばそれと海面

水温との関係性に着目することも重要なのです。この種の古気候・古海洋データを比較し、その相互作用を見ていくことは、例えば水害と干害といった気象災害の関係性を見直すことにもつながります。具体的な話として、中塚ラボが組んだ中部日本の年輪データからの相対湿度は陸面の気温と相関関係を有しています。その背景にある重要なファクターが、大気中の水蒸気の量です。基本的には逆相関の関係にあった夏の気温と相対湿度とは、2005年以降には正の相関を見せるようになります。つまり、気温の上昇が続いているのに、相対湿度も上昇しているのです。この原因として中塚氏が挙げるのが、海水温の上昇なのです。実のところ、東アジア周辺海域の表面水温は世界一高いのです。そして現代と同様にこの地域の海面水温が高かった時代が、14世紀の前半でした。相対湿度と気温の逆相関が成立しない1320～30年代には、海水温の上昇によって現代と同じような温暖かつ湿潤な気候状況が発生し、水害と干害とが同時に発生して社会に大きな被害を与えることになりました。このように、古気候学と古海洋学との架橋は、一見相反するよう見える水害と干害とが同時発生するメカニズムを我々に教えてくれます。個々のデータの拡充はもちろん、それら相互の連携もまた不可欠であることを教えてくれる報告でした。

その後は、大貫氏の代わりに諫早が黒死病研究のレビューを行いました。その多くは内容を公開講座のもと重複させていますので、ここでは割愛します。

休憩を挟んでの第2部は、四日市氏の報告「帝国の形成・分裂と気候変動」から始まりました。冒頭で四日市氏は、「14世紀の危機」について、これは誰にとっての「危機」であったのかと問います。例えばモンゴル語でくを意味する「ウルス」の原義は、その規模の多寡を問わない人間社会そのものでした。14世紀の社会は当然ながら複雑な構造を有しており、「危機」とは帝国にとってのものであったのか、民衆にとってのものであったのか。社会のどの部分の構成員であったのかによって「危機」の意味合いも変わってくるのです。元朝の中央政府にとっての政権崩壊のメカニズムは、豊かな経済力でもって華北を潤してきた江南からの道が寸断されたことにありました。1323年の英宗シデバラの死以降に緩み始めていた皇帝による中央集権は、1328年の天暦の内乱においてその機能不全が決定的なものとなり、1341年からは特に、王朝は軍閥政権の様相を呈します。こうした元朝中期以降の流れのなかで、どの社会のどのタイミングでの「危機」なのか、という問いには多様な回答がありえるのです。さらに四日市氏は史料の性質にも言及します。『元史』の帝紀は起居注→実録→帝紀という編纂プロセスを経ていることが知られていますが、成宗テムルは編纂過程において記述をかなり削ったと言われており、自然災害の記述に関しても、どこまで客観性が担保できるのか、史料の扱いには慎重を要することが確認されています。政府による災害対策を意味する賑恤も、まずは税免除、より深刻な場合には米粟の支給となるわけですが、災害記述は多くの場合この種の施策とセットであり、政府の主観というものがそこには大いに反映されていることを忘れてはならないのです。

次の報告は西村氏の「唐末の動乱と気候変動」です。西村氏が対象とするのは14世紀ではなく唐代（7～10世紀）です。西村氏は中塚氏が提唱する中周期変動仮説を中国の事例に当てはめ、16～64年周期で気候成分の振幅変化が大きい時期が確かに戦乱の時代に当てはまっていることを確認します。西村氏が専門とする唐末から五代にかけての時代も800年以降の時代において大きな振幅が見られ、それは混乱の時代と重なっているのです。その前提のもとで、西村氏はディ・コズモ氏らのモンゴル高原の早魃とウイグル帝国の崩

壊についての研究に言及します。その研究はウイグル帝国が崩壊する840年に先立つ時期、モンゴル高原では50年にわたって旱魃が起きていたことを伝えるのです。当時は唐とウイグルとのあいだで絹馬交易が行われていたわけですが、唐側の史料は盛んにウイグルの馬が瘦せていて使い物にならないと糾弾しています。この「事実」の背景にこのような旱魃を見ることのできる可能性があるのです。さらにより広域に気候データをみる西村氏は、この旱魃がモンゴル高原のみならず、中央アジアやチベットにおいても起こっていることを看取します。ウイグルの滅亡に先立つ50年は東部ユーラシアにおいて唐・ウイグル・吐蕃が鼎立していた時代でした。そしてウイグル(840年)だけではなく、吐蕃(842年)もまたこの時期に滅亡しています。唐に関しても783～844年の時期には、遊牧民が大挙して華北に押し寄せてきます。気候データではこの時期の華北は相対的に湿度が保たれていることが分かり、その意味で比較的気候条件のよかったこの地域に遊牧民が移動してきた可能性を指摘できるのです。

最後の報告は諫早による「フレグ・ウルスの農業危機」でした。フレグ・ウルスはラスト・エンペラーであるアブー・サイード即位からしばらくの時代において、王朝の存続そのものを脅かすような内憂外患に立て続けに見舞われました。そのクライマックスとも言えるのが1319年に起きた主要アミールたちの大規模蜂起です。この反乱についてメルヴィル氏は、フレグ・ウルスの宮廷年代記が「語らないもの」を隣国のマムルーク朝史料から抽出し、この反乱を君主アブー・サイード自身による摂政チョバン追い落としのためのものと位置付けました。この報告もメルヴィル氏同様、「語らないもの」に注目してこの1319年反乱を見直そうとするものです。しかしそれは君主の関与ではなく異常気象ということになります。マムルーク朝史料や普段は異常気象についてほとんど語らないフレグ・ウルスの宮廷史料すら、1314/15年から1318年にかけて主としてイラク北部からアナトリアにおよんだ大規模な異常気象に触れるものがあります。そしてそれは文献データからだけではなく、気候データからも裏付けられるのです。ヨーロッパ史の枠組みでの「14世紀の危機」の先駆けとなる「大飢饉」、北西ヨーロッパを襲った寒冷化と長雨とをもたらした気候異常は、この時期に亡くなった著名人の名を取って「ダンテのアノマリ」と呼ばれますが、この時期にはアナトリアも異常気象に見舞われており、それは北方とは異なり、旱魃という災害を招来していたことが年輪データから知られます。さらにイラク北部の洞窟内生成物から採られたデータは、この地域にこの時期、大きな旱魃が起こっていたことを伝えているのです。この前提で1319年反乱を見るとまた違った景色が見えてきます。反乱の首謀者の多くが、その直前の時期に災害に見舞われていたアナトリアやディヤールバクルに地縁を有する者たちなのです。

上記の個別報告の後に、ラウンドテーブル「『14世紀の危機』研究：我々は何を明らかにしたのか」を経て、議論がフロアに開かれました。まずは諫早からこの「14世紀の危機」研究について、今年度より基盤研究Aの枠で後継プロジェクト「気候変動・疫病・戦争：アフロ・ユーラシアからの『14世紀の危機』」が採択され、もう5年、より規模を拡張した形でプロジェクトが継続することが語られました。議論の場では例えば、文献・気候問わず、データの扱いについての議論が出ました。例えば中国に関しては江南のデータやモンゴル高原のデータはあるのに比して、王朝の中心地である華北についてはデータが足りていない現状があります。また文献データに関しては、その信憑性が問われましたが、もちろんそれは気候データに関しても同じであり、主観/客観はその史料性に関して二分できるものではな

く、いずれもがグラデーションを有しています。双方ともに確かな理解に基づく資料 / 史料 / 試料批判が不可欠なのです。特に中国は金銀といった貴金属や塩・米といった主要物産の価格の推移が気候変動や災害に関する重要な間接指標になりうるという指摘も出ました。また文献データと災害データとが一致しない場合にどう考えるのかという議論も深考を促すものです。危機は起きていなかったのか、それとも社会のレジリエンスがそれを回避したのか、それを判断することは、例えば危機のサイクルを概念化することや、交易・農業・遊牧・治水といった社会の様々なファクターをトピック別に検討していくことで果たされる部分があるかもしれません。

依然として道半ばではありますが、多くの方々に支えられてここまで来られたこと、また次の5年も意味のある道になりそうということが実感できた機会となりました。あらためて多くの方々のご支援に感謝申し上げます。[諫早]

## 学会カレンダー

2025年	5月22-24日	ASN (Association for the Study of Nationalities) 29th Annual World Convention 於コロンビア大学 <a href="https://www.asnconvention.com/">https://www.asnconvention.com/</a>
	5月24日	2025年度日本スラヴ学研究会総会・ミニシンポジウム・講演会 於専修大学神田キャンパス <a href="https://sites.google.com/view/jsssl/home">https://sites.google.com/view/jsssl/home</a>
	6月12-15日	ESCAS (European Society for Central Asian Studies) 2025 Regional Conference 於タシケント、サマルカンド <a href="http://www.escas.org/next-conference/2025-samarkand-conference/">http://www.escas.org/next-conference/2025-samarkand-conference/</a>
	6月28-29日	日本比較政治学会第28回研究大会 オンライン <a href="https://www.jacpnet.org/convention/">https://www.jacpnet.org/convention/</a>
	6月29-30日	比較経済体制学会第65回大会 於大阪経済大学 <a href="https://www.jacesweb.com/conference2025/">https://www.jacesweb.com/conference2025/</a>
	7月3-4日	スラブ・ユーラシア研究センター 2025年度夏期国際シンポジウム 於SRC
	7月21-25日	ICCEES (International Council for Central and East European Studies) XI World Congress 於ユニバーシティ・カレッジ・ロンドン <a href="https://www.iccees2025.org">https://www.iccees2025.org</a>
	8月25-30日	XVIIth International Congress of Slavists 於ソルボンヌ大学 <a href="https://mks-paris.sciencesconf.org">https://mks-paris.sciencesconf.org</a>
	10月11-12日	ロシア史研究会 2025年度大会 於青山学院大学青山キャンパス <a href="https://www.roshiashi.com/annual-conference">https://www.roshiashi.com/annual-conference</a>
	10月17-19日	日本国際政治学会 2025年度研究大会 於神戸国際会議場 <a href="https://jair.or.jp">https://jair.or.jp</a>
	10月23-24日	2025 ASEES (Association for Slavic, East European, and Eurasian Studies) Virtual Convention オンライン <a href="https://aseees.org/convention/2025-convention/">https://aseees.org/convention/2025-convention/</a>
	10月25-26日	日本ロシア文学会第75回全国大会 於東京大学駒場キャンパス <a href="https://yaar.jp.org/">https://yaar.jp.org/</a>

11月8-9日	ロシア・東欧学会 2025 年度研究大会 於同志社大学 <a href="https://www.jarces.jp">https://www.jarces.jp</a>
11月20-23日	2025 ASEES (Association for Slavic, East European, and Eurasian Studies) Annual Convention 於ワシントン DC <a href="https://aseees.org/convention/2025-convention/">https://aseees.org/convention/2025-convention/</a>

[編集部]

## 大学院修了者の声

### 社会人院生的「スラ研のすすめ」のような何か

新井 洋史

まず、スラ研で学ぶことを検討中の方々を念頭に、総合演習（「金曜ゼミ」）の魅力をお伝えするところからこの小文を始めたいと思います。毎週金曜に行われるこのゼミで、院生は各学期に最低1回の発表が義務付けられます。その時には、自分の発表に対して他の院生や教員の方々から、厳しくも有意義な質問やコメントをいただくことになります。ただし、これは大学院として当然の営みです。私にとって何より貴重だったのは、他の院生の皆さんの発表です。私は社会人学生として入学しましたが、それまで人文科学系の分野などには全く縁がありませんでした。そんな私にとって、未知のテーマについての研究者の卵の報告は十分迫力がありました。「卵」とはいえ博士後期課程の学生は孵化直前の状態ですから、いわばセミナーや講義を聞いているようなものです。また、続いて行われる質疑応答からも大いに刺激を受けました。鋭い質問に接するたび、「自分もこういう質問ができるようになりたい」と思ったものです。ちなみに、私以前の遠隔地居住の社会人院生の皆さんにとっては、毎週の金曜ゼミに出席することはほぼ不可能でした。私は新型コロナウィルス感染が続く中で入学したので、オンライン開催が定着しており、居住地である新潟にいながら、あるいは出張先から出席することができました。不幸中の幸いというべきか、よい巡りあわせだったと思います。

さて、私が博士（学術）の学位をいただいたのは2025年3月です。2021年4月に北海道大学文学院博士後期課程に入学しましたが、3年間では論文を完成させることができませんでした。在学3年目が終わろうとする時期、私には理論上3つの選択肢がありました。第1に、学位取得をあきらめる。第2は、引き続き在学して学位取得を目指す。第3は、単位修得退学した上で、学位取得を目指す。このうち第1の道は論外で、残り2つのうちどちらにするかを考え、第3の道を選びました。そうすれば授業料を払わなくてよくなるという実利的な側面もありましたが、なにより「退路を断つ」覚悟をしなければ成就しないだろうと考えたからです。その際に決め手になったのは、「単位修得退学後1年以内に学位申請論文を提出した学生は、論文審査料を請求せず、論文審査に合格した場合は課程博士として取り扱う」というルールでした。1年以内に論文を出さなければ、3年間の在学が無駄になるという状況に自らを追い込んだわけです。今回は、それが奏功して何とか学位をいただくことができました。

「今回は」と書いたのは、文学院に入学したこと自体、自分としては「退路を断った」つもりだったのに、上述の通り3年では目標を実現できなかったからです。話は飛びますが、私は1990年に新潟県庁職員として社会人キャリアをスタートしました。その後、新潟県などが設立した「環日本海経済研究所（ERINA）」というシンクタンクへの出向を通じ、徐々に研究の仕事に近づいてきました。それでも当初の仕事は、与えられた課題について調べる「調査」が中心であり、自らテーマを設定して探求を進める「研究」ではありませんでした。しかし、出向先のERINAに転籍したころから、徐々に研究的な仕事が増えてきました。そんな私に対して、当時の西村可明所長、その後任の河合正弘所長は、しきりに博士号取得を促して下さいました。「あなたなら、これまでの業績をきちんとまとめて論文博士の申請をすれば大丈夫」といった心強い励ましのお言葉を何度もいただきました。その都度、「わかりました、頑張ります」と答えるものの、怠け者の性分ゆえ、全く作業が進まないという時期が約10年にも及びました。この状態に終止符を打つべく決断したのがスラ研に入ることでした。その時は、3年間という時限を設定して退路を断ったつもりでした。しかしながら、その決断だけでは足りず、最後は「単位修得退学後1年以内に提出しなければ元の木阿弥になってしまう」という、もう一段強いプレッシャーを自らに課すことで、ようやく目標を達成したことになります。

私の論文タイトルは「北東アジアにおける国際協力を通じた地方振興に関する考察」というものです。30余年の職業人生を反省しながら論文をまとめ、還暦のタイミングで学位を授かりました。半生の区切りをつけることができた思いです。1990年代には、東西冷戦終結を受け、環日本海経済圏の実現に向けた様々な取り組みがなされていました。ロシアのことを何も知らないまま、人事課に命じられてハバロフスクでのロシア語研修に赴いたのは、ロシア連邦成立直後の1992年2月でした。ERINAが設立されたのは1993年です。翻って近年は、当時とは全く異なる世界になっています。新潟県庁を辞めて移ったERINAも2023年3月に解散してしまいました。（論文執筆が遅れた言い訳として、職場が無くなる、新たな職場に移る、というドタバタの中で落ち着いて研究ができなかったという事情を挙げさせてください。）こうした大きな情勢変化が起こった（起こりつつある）タイミングで、一つの時代を振り返る作業をしたことは、それなりに有意義であり、少なくとも次代の研究者にとっての研究資料を用意することはできたものと考えています。

最後になりますが、この場をお借りして、入学時の指導教員だった田畑伸一郎先生、その後を引き継いでくださった服部倫卓先生をはじめとするスラ研の先生方、お世話をいただいた職員の皆様、そして「金曜ゼミ」でともに奮闘した院生の皆さんに感謝申し上げます。

以上、個人的なことばかりを書き連ねましたが、このような私の経験を励みにして、スラ研での学びに向かって一歩踏み出す方がおられれば、望外の幸いです。

## 編集室だより

### *Acta Slavica Iaponica*

この3月にアクタ 45 巻が刊行されました。下記の通り、論文 5 本、研究ノート 1 本、書評 2 本の構成です。ポーランドのフェミニスト運動が巻頭を飾る本巻は、ボスニア・ヘルツェゴヴィナのアートと国家、セルビア語辞書編纂の政治性から、北部サーミ人の詩作に見える動物と自然の寓意、ソ連期の思想家の仏教哲学やソ連期オデッサの日本領事館の人間模様に至るまで、バライティに富んだトピックを扱う、アクタらしい巻となっております。全てのものがアクタのウェブページ（下記 URL）からダウンロード可能です。

<https://src-h.slav.hokudai.ac.jp/publicntn/index2.html>

#### ARTICLES

1. Magdalena Grabowska, "Why Was It Possible? Recent Abortion Protests and the Longer Feminist Struggle for Collective Reproductive Agency in Poland."
2. Jasmina Gavrankapetanović-Redžić, "Bosnia and Herzegovina's Pavilion at the Venice Biennale of Art."
3. Danko Šipka, "Authority, Nation, and Lexicography: A Case Study of Major Serbian Dictionaries."
4. Tintti Klapuri, "Squirrels as Traffic Lights: Human–Non-human Tropes in the Kola Sámi Writer Oktiabrina Voronova's Poetry."
5. Alyssa DeBlasio, "Alexander Piatigorsky: Buddhism as Object and Approach."

#### RESEARCH NOTE

1. Svitlana Pavlenko, "Japanese Diplomacy in Soviet Ukraine: Challenges Faced by the Consulate in Odesa (1926–1937)."

#### BOOK REVIEWS

1. Juozapas Paškauskas, "Book Review: Darius Staliūnas and Yoko Aoshima, eds., *The Tsar, the Empire, and the Nation: Dilemmas of Nationalization in Russia's Western Borderlands, 1905–1915* (Budapest: Central European University Press, 2021)."
2. Tetsu Akiyama, "Gulmira S. Sultangalieva and Ulzhan Zh. Tuleshova, eds., *Kazakhskoe dvoryanstvo XIX-nachalo XX vv. Monografiya v dokumentov* (Almaty: Qazaq universiteti, 2020)."

あらためて 45 巻の編集に関わって下さった全ての方々にあつく御礼申し上げます。

現在、46 巻の 1 号（特集号）と 2 号の編集を同時並行で進めております。その次となります 47 巻の締め切りは、2025 年 7 月 22 日（火）となっております。皆さまからの投稿をお待ちしております。[諫早]

# 会議

## センター協議員会

2024年度第3回協議員会 2025年1月10日（オンライン開催）

1. 協議員会における電子投票の実施方法について
2. 教員人事について
3. 部局間交流協定の締結について

2024年度第4回協議員会 2025年2月3日～5日（メール開催）

1. 教員人事について（クロスアポイントメント新規）
2. 令和7年度客員研究員の採用及び称号付与について
3. 大学間交流協定の更新について

2024年度第5回協議員会 2025年2月6日～7日（電子投票）

1. 教員人事について（クロスアポイントメント新規）

2024年度第6回協議員会 2025年2月19日（オンライン開催）

1. 教員人事について
2. 兼任について

2024年度第7回協議員会 2025年2月20日～21日（電子投票）

1. 教員人事について（特任助教）

2024年度第8回協議員会 2025年3月12日（オンライン開催）

1. 教員人事について（特任助教）
2. 教員人事について（准教授または講師）
3. 研究生の受入について
4. 規程の一部改正について

2024年度第9回協議員会 2025年3月17日～18日（電子投票）

1. 教員人事について（特任助教）

[事務係]

## 誰が何をどこで

2025年度の専任教員、助教、日本人客員教員、非常勤研究員（五十音順）の研究成果・研究余滴のアンケート調査を以下のようにまとめました。[編集部]

青島陽子 ① 1 学術論文 ▼「脱植民地化」とロシア帝国論：ウクライナ史とロシア史の展望『思想』7月号：37-54 (2024) ▼現代の政治的文脈におけるウクライナとロシアのネーション観：「帝国」と「脱植民地化」を手がかりに（歴史学研究会編『ロシア・ウクライナ戦争と歴史学』18-48, 大月書店, 2024年）② その他業績（論文形式）(3) 書評 ▼ Katarzyna Murawska-Muthesius, *Imaging and Mapping Eastern Europe: Sarmatia Europea to Post-Communist Bloc* [Advances in Art and Visual Studies], (New York and London: Routledge, Taylor&Francis Group, 2021) *Slavic Review*, 83(1): 166-167 (2024) ⑤ 学会報告・学術講演 ▼ Drifting Apart: Native Language Education Policies in the Polish and Baltic Provinces at the Beginning of the Twentieth Century, SRC 2024 Summer International Symposium “The Crucible of a New World?: Russia’s Borderlands at the Dawn of the Twentieth Century,” SRC (2024.7.18) ▼ Multiethnic People as a strategy of the Russian Federation, HU-UMA (Hokaido University and University of Massachusetts Amherst) Symposium on “Post/Imperial Political Ecosystems: How Our World Has Been Shaped,” Online (2025.3.11)

安達大輔 ② その他業績（論文形式）(5) その他 ▼ポストソ連メロドラマの国際共同研究プロジェクトが本格始動『スラブ・ユーラシア研究センターニュース』173: 20-23 (2024) ⑤ 学会報告・学術講演 ▼趣旨説明, シンポジウム「ステレオタイプの力? : (ポスト)ソ連文化におけるドラマとメロドラマ」, 京都大学 (2024.10.19) ▼ Russian Melodrama after the War, IREEES (SNU)-SRC (HU) 10th Joint Symposium “Co-existence and Interdependence in Eurasia and East Asia,” Seoul National University (2024.6.11) ▼ Melodrama as Heritage?: Rethinking Melodrama Studies in Russian and Soviet Culture, Heritage of Soviet Melodrama, Columbia University (2024.5.8)

諫早庸一 ① 1 学術論文 ▼ “Converting” Knowledge, Culture and Themselves: Mongol Imperial Rule in Thirteenth- and Fourteenth-Century Eurasia, *Inner Asia* 26(2): 279-301 (2024) ② その他業績（論文形式）(3) 書評 ▼ピーター・ジャクソン『チンギス・ハンからタメルランへ：再び目覚めるモンゴルのアジア』（イェール大学出版局, 2023)『北大史学』64: 112-120 (2024) (5) その他 ▼モンゴル（後藤明編『星の文化史：世界13地域における星の知識・伝承・信仰』162-169, 丸善出版, 2025）▼気候変動（西洋中世学会編『西洋中世文化事典』4-5, 丸善出版, 2024）▼とぶ砂の国へ：問われることなく、問うことのできた時間『現代思想』52(16): 168-173 (2024) ▼『読書アンケート2024：識者が選んだ、この一年の本』4-5, みすず書房, 2025 ▼2024年度公開講座「シルクロード：交差する時間・空間・ディシプリン」開催される『スラブ・ユーラシア研究センターニュース』174: 13-15 (2025) ▼内陸アジア史学会主催シンポジウム「モンゴル帝国史研究の現在と課題」参加報告記『スラブ・ユーラシア研究センターニュース』172: 46-49 (2024) ⑤ 学会報告・学術講演

▼ From Genghis Khan to Tamerlane as a Socio-Ecological Transition: Climate Changes, Pandemics and Demographic Dynamics, Mongol Zoominar Presents Book Launch, Peter Jackson's From Genghis Khan to Tamerlane, Online (Louis Frieberg Center for East Asia Studies at the Hebrew University of Jerusalem) (2024.5.31) ▼ 21 世紀のシルクロード論争：黒死病はどこから来たのか, 2024 年度公開講座「シルクロード：交差する時間・空間・ディシプリン」, SRC (2024.10.28) ▼ フレグ・ウルスの崩壊：「14 世紀の危機」の解明に向けて, 内陸アジア史学会主催シンポジウム「モンゴル帝国史研究の現在と課題」, 早稲田大学 (2024.6.22) ▼ もうひとつの「天文対話」：モンゴル帝国期 (1206 ~ 1368 年) 天文学の東西, 武蔵大学東西文化融合史研究会第 9 回例会「(共通テーマ) 知と技術の交流と融合：アジア世界で起きたこと」, 武蔵大学 (2024.12.20) ▼ フレグ・ウルスの農業危機：1319 年反乱再訪, 科研研究会「「14 世紀の危機」についての文理協働研究：この 4 年を振り返って」, SRC (2025.3.8) ▼ シルクロード：交差する時間・空間・ディシプリン, 日本中央アジア学会 2024 年度年次大会公開パネル「シルクロード：ユーラシアの道と日本」, 東京外国語大学 (2025.3.16)

岩下明裕 ㊦ 2 その他業績 (論文形式) (3) 書評 ▼ クラウス・ドッツ (町田敦夫訳) 『新しい国境 新しい地政学』 (東洋経済新報社, 2021) 『国際政治』 214 (5) その他 ▼ はしがき (山田良介編 『ダークツーリズムを超えて：北海道と九州を結ぶ』 2- 4, 北海道大学出版会, 2024) ▼ 論壇 『熊本日日新聞』 (月 1 回連載 2024.4-2025.3) ㊦ 5 学会報告・学術講演 ▼ Co-existence and Interdependence in Eurasia and East Asia, Seoul National University Special Symposium (2024.6.11) ▼ Northeast Asian Geo-politics under Russia's War in Ukraine, Adam Mickiewicz University Open Lecture Series (2024.6.24) ▼ Japan-Germany-Poland: Borderland and Borderland Studies as a Research and Social Challenge, University of Gdańsk Interdisciplinary Conference (2024.6.28) ▼ How to Deter Russia: Resilience of Ukraine and of the Western Community, Warsaw East European Conference (2024.6.28) ▼ Resilience as a Deterrence Strategy: Towards a Comprehensive Security Panorama, Warsaw East European Conference (2024.6.30) ▼ Eurasia from the East 2024, Davis Center for Russian and Eurasian Studies, Harvard University (2024.11.18) ▼ The Ukraine War: Perspectives from Northeast Asia, Center for the National Interest Seminar (2024.11.20) ▼ Second Japan-US Dialogue on Russia-China Relations in Tokyo, Sasakawa Foundation Workshop (2024.3.6)

宇山智彦 ㊦ 2 その他業績 (論文形式) (1) 総説・解説・評論等 ▼ カザフスタンのミドルパワー宣言：大国追従でも「グローバルサウス」でもない第三の道, 中曽根平和研究所ロシア研究会コメンタリー (2024.6.24) [https://www.npi.or.jp/research/data/npi\\_commentary\\_uyama\\_20240624.pdf](https://www.npi.or.jp/research/data/npi_commentary_uyama_20240624.pdf) ▼ Japan Readies for First Central Asia Summit: Will Japan Return to Pioneering Diplomacy?, *The Diplomat* (2024.8.7) ▼ 日本の中央アジア外交戦略はどうあるべきか：創造的なミドルパワー外交の構築へ 『外交』 88: 122-127 (2024.12) (2) 研究ノート等 ▼ Three Myths about Alash Orda: The Ideas of Kazakh Nationhood and Their Relations with Turkistan (Temur Xo'jao'g'li, ed., "Jadidlar: milliy o'zlik, istiqlol va davlatchilik g'oyalari" xalqaro konferensiya materiallari, 334-338, Toshkent: Yosh Kuch, 2024) (5) その他 ▼ (座談会) (神谷万丈、国末憲人と) 「一〇年戦争」がもたらした国際社会の変質 (FOCUS ◎ウクライ

ナ戦争三年目の試練』『外交』84: 58–69 (2024.4) ▼(講演録) 中央アジアの国際関係の変化と日本の役割『ポストーク (NPO 法人ロシア極東研機関誌)』60: 13–18 (2025.1) ㊦5 学会報告・学術講演 ▼国家論から見る民族問題と紛争, 第 72 期同友会大学, 北海道中小企業同友会 (2024.4.5) ▼中央アジアの国際関係における日本の役割: 「中央アジア+日本」対話・首脳会議に向けた JICA へのメッセージ, 「内陸アジア人材ネットワーク」講演会, JICA 本部 (2024.5.20) ▼権威主義体制の統治能力・外交能力: 中央アジア諸国を例に, 2024 年度中東☆イスラーム教育セミナー, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 (2024.9.20) ▼地域研究の視点から: ウクライナ戦争と大国主義・権威主義・多極主義, 日本学術会議公開シンポジウム「迷走する国際秩序と人道危機」, 東京大学駒場 I キャンパス (2024.10.5) ▼松里公孝著『ウクライナ動乱』について: ロシアなきウクライナ戦争論?, EES/SRCW スペシャルセミナー「ウクライナ戦争と旧ソ連圏」, SRC (2024.10.18) ▼中央ユーラシアの「脱植民地化」: ロシア革命期からウクライナ戦争期まで, スラブ・ユーラシア研究センター公開講演会, SRC (2024.12.13) ▼中央アジア権威主義体制の多様化: ウズベキスタンの疑似政党政治の進化とクルグズスタン (キルギス) の義賊的ポピュリズム, 中曽根平和研究所「東アジア国際問題の内在的考察」ロシア班研究会, オンライン (2024.12.19) ▼ペレストロイカ期中央アジアの民族問題: ソ連中央の対応がもたらした遠心力と「共和国政治」の浮上, 「中国の統治におけるソ連・ロシア要因」研究会, SRC (2025.2.10) ▼ウクライナ侵攻開始後の中央アジア諸国と中国の関係, NPI/SRC 共催シンポジウム「4 年目を迎えようとしているウクライナ戦争とロシア・旧ソ連諸国」, SRC (2025.2.23) ▼Japan's Role in Enhancing the Small and Middle Power Diplomacy of Central Asian Countries, Expert Dialogue “Central Asia + Japan: Current Trends and Prospects,” Maqsut Narikbayev University, Astana (2025.3.6)

ウルフ・ディビッド (David Wolff) ㊦2 その他業績 (論文形式) (5) その他 ▼The Japanese Empire and Russia, 1868–1945 (David Ludden et al., eds., *The Oxford Research Encyclopedia of Asian History*, 2024) (3) 書評 ▼Franck Billé and Caroline Humphrey, *On the Edge: Life along the Russia-China Border* (Cambridge, MA: Harvard University Press, 2021) *Pacific Affairs*, 97(4) (2024) ㊦5 学会報告・学術講演 ▼Did Stalin Save Taiwan?, Bielefeld, Germany (2024.6.24) ▼ハルビンの物語: ひとつの終章, 公開講演, SRC (2024.9.27) ▼Eurasia from the East 2024, Davis Center for Russian and Eurasian Studies, Harvard University (2024.11.18) ▼Internalizing the Impact of Exile: Migration Experience, Liberation, and Identity Change, 56th Annual Convention of Association for Slavic, East European and Eurasian Studies (ASEEES), Boston (2024. 11.24)

ガブランカペタノヴィッチ=レジッチ・ヤスミナ (Jasmina Gavrankapetanović-Redžić) ㊦1 学術論文 ▼Bosnia and Herzegovina's Pavilion at the Venice Biennale of Art, *Acta Slavica Iaponica* 45: 23–47 (2024) ㊦5 学会報告・学術講演 ▼サイエンストーク「スレブレニツァ虐殺をめぐるジェンダー・記憶・暴力」, 第 66 回北大祭・施設一般公開「過去の記憶と現在 (いま): スラブ・ユーラシア」, SRC (2024.6.8)

塩谷哲史 ㊦ 1 学術論文 ▼Forgotten project of a private agricultural plantation in the Khanate of Khiva, Uzbekistan, *Central Asian Survey* 44(1): 105-121 (2025) ㊦ 2 その他業績 (論文形式) (5) その他 ▼「中央アジア鉄道史」(老川慶喜ほか編『鉄道史大事典』368-369, 朝倉書店, 2024) ▼「近代移行期中央アジアにおける歴史叙述の転換: ユースポフ『歴史』を中心に」(小二田章編『地方史誌から世界を読む』301-315, 勉誠社, 2025) ㊦ 5 学会報告・学術講演 ▼Khan, Entrepreneurs and Empire: Imperial Russian Development Projects in Khiva, 1908-1917,” SRC 2024 Summer International Symposium “The Crucible of a New World?: Russia’s Borderlands at the Dawn of the Twentieth Century,” SRC (2024.7.18) ▼Agricultural Investments of the Russo-Asiatic Bank in the Khanate of Khiva, International Conference “Geopolitics, Migrations and Identities in Central Eurasia” (Joint Meeting CESS-ESCAS), Gulbenkian Foundation, Portugal (2025.1.8)

仙石学 ㊦ 1 学術論文 ▼ヴィシエグラード諸国における 2024 年欧州議会選挙『国際問題』721: 34-44 (2024) ㊦ 2 その他業績 (論文形式) (1) 総説・解説・評論等 ▼「2024 年欧州議会選挙: 東欧諸国の動向『伝統的安全保障リスク』研究会 日本国際問題研究所」(2024.7.17) (5) その他 ▼現代ポーランドの光と影: 国のあり方をめぐる二大勢力の対抗? (渡辺克義、白木太一、吉岡潤編『ポーランドの歴史を知るための 56 章 (第 2 版)』329-335, 明石書院, 2024) ▼「ケアと政治」(日本比較政治学会編『比較政治学事典』丸善出版, 2025) ㊦ 5 学会報告・学術講演 ▼中東欧諸国の動向, 日本国際問題研究所研究会「2024 年欧州議会選挙: EU はどこに向かうのか」, オンライン (2024.6.20) ▼ヴィシエグラード諸国における 2024 年欧州議会選挙, 日本国際問題研究所研究会「2024 年欧州議会選挙『EU はどこに向かうのか: 欧州議会選挙後の内政と外交』を論じる」, オンライン (2024.11.27) ▼欧州議会選挙と東欧政治: ヴィシエグラード諸国を中心に, 日本国際政治学会 2024 年度研究大会, 札幌コンベンションセンター (2024.11.17)

兔内勇津流 ㊦ 2 その他業績 (論文形式) (1) 総説・解説・評論等 ▼成富道正の樺太史講話について『会報』(函館日口交流史研究会)45: 14-23 (2024) (2) 研究ノート等 ▼(及川琢英、有田政博と共著)立花小一郎回顧余録(七)大正 10 年 7-9 月(翻刻)『近現代東北アジア地域史研究会 Newsletter』36: 1-34 (2025) (3) 書評 ▼ボルジギン・フスレ『日本人のモンゴル抑留の新研究』『週間読書人』(2024.7.5) (5) その他 ▼成富道正の樺太史講話(1924)について『道史協通信』(2025.3.20) ㊦ 5 学会報告・学術講演 ▼成富道正の「樺太史講話」(1924 年)について, 北海道史研究協議会 2024 (歴史国境学研究会・日露関係史研究会共催), かでる 2・7 (2024.6.8) ▼北大スラブ研から見たロシア史関係資料収集, ソビエト史研究会 2024 年度年次大会, 専修大学 (2024.7.6) ▼北大スラブ・ユーラシア研究センター所蔵利尻・樺太漁業家文書(仮称・明治~昭和期)について, 科研費「日露国境の変遷とその影響に関する学際的研究: 「歴史国境学」創出への挑戦」研究会, 海の駅駕泊 (2024.8.4) ▼アナトーリー・ペペリヤーエフ(1891-1938)をめぐって その 2, 第 19 回シベリア出兵史研究会, 日本大学文理学部 (2024.9.2) ▼書評: 小林昭菜『シベリア抑留』(2018 年), 第 40 回日露関係史研究会, 拓殖大学 (2024.12.7) ▼二月革命から地方公会召集までのロシア正教会(その 1), 「プラトンとロシア」研究会, 早稲田大学 (2025.3.30)

長縄宣博 ㊦1 学術論文 ▼ Introduction: Russia's Empire and Emancipation Dreams in the Long Twentieth Century (Norihiko Naganawa, ed., *Dreams of Emancipation: A Transnational History of Revolutionary Russia*, 1–21, Boston: Academic Studies Press, 2025) ▼ Making an Anti-Imperialist Empire: The Soviets' Entanglements with Central Asia, Iran, and the Red Sea in the 1920s (Norihiko Naganawa, ed., *Dreams of Emancipation*, 143–170) ▼ 重なる紐帯、移ろう信頼：帝政末期アストラハンのムスリム社会の場合（近藤信彰編『権力とネットワーク（イスラームからつなぐ5）』219–243, 東京大学出版会, 2024） ▼ Back to the Future: Möhämmäd Zahir Bigiev and His Journey to Bukhara in the Age of Steam and Print, *Journal of Central Asian History* 3: 262–295 (2024) ㊦3 著書 ▼ *Dreams of Emancipation: A Transnational History of Revolutionary Russia*, 283, Boston: Academic Studies Press, 2025 ㊦5 学会報告・学術講演 ▼ Waqf Documents from the Archive of the Orenburg Muslim Spiritual Assembly, the Archives of Islam in the Russian Empire (16th–early 20th Centuries), Commission for the Study of Islam in Central Eurasia, Austrian Academy of Sciences (2024.7.3) ▼ Toward a Social History of Cosmopolitan Muslims: A Case of Tatars in Baku, the Archives of Islam in the Russian Empire (16th–early 20th Centuries), Commission for the Study of Islam in Central Eurasia, Austrian Academy of Sciences (2024.7.4) ▼ Eurasia from the East 2024, Davis Center for Russian and Eurasian Studies, Harvard University (2024.11.18) ▼ Between Freedom and Sectarianism: Muslim Astrakhan at the Dawn of the Twentieth Century, 56th Annual Convention of Association for Slavic, East European and Eurasian Studies (ASEEES), Boston Marriott Copley Place (2024.11.23) ▼ The Long Twentieth Century Across Russia and the Middle East and General Discussions, HU-UMA (Hokaido University and University of Massachusetts Amherst) Symposium on “Post/Imperial Political Ecosystems: How Our World Has Been Shaped,” Online (2025.3.7, 11)

野田仁 ㊦2 その他業績（論文形式）（1）総説・解説・評論等（5）その他（インタビュー） ▼ Жин Нода: Қазақ хандары мен Цинь империясының байланысы тым терең, «Егемен Қазақстан» (2025.3.4) ㊦5 学会報告・学術講演 ▼ Әлем мұрағаттарындағы қазақ тарихына байланысты деректер, «К.Ш. ХАФИЗОВАНЫҢ ЕҢБЕКТЕРІНДЕГІ ХАЛЫҚАРАЛЫҚ ДИАЛОГ ЖӘНЕ ӨЗАРА МӘДЕНИЕТ АЛМАСУ» (2024.4.25) ▼ The Kazakh Khanate's Relationships with the Qing Empire in the 18-20th c., Eurasian History Speakers Talk Series, Nazarbayev University (2024.9.7) ▼ 帝国のあいだの秩序：露清間の国際集会裁判の事例，SRC セミナー，北海道大学 (2024.10.1) ▼ 新疆からカザフスタンへの道：鉄道輸送と開発，ワークショップ「現代カザフスタンの開発・環境・国際関係」，東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 (2024.12.6) ▼ カザフ・ハン国の歴史 15 世紀から 20 世紀まで，スラブ・ユーラシア研究センター公開講演会，北海道大学 (2025.3.21)

野町素己 ㊦1 学術論文 ▼ (with Sofija Miloradović) Reč unapred (Sofija Miloradović and Motoki Nomači, eds., *Sećanje na akademika Milku Ivić. Delanje i naučno nasleđe* (SES 36/Posebna izdanja Instituta za srpski jezik SANU knj. 1), 7–9, Beograd: Institut za srpski jezik SANU, 2024) ▼ Akademik Milka Ivić u Tokijskom institute za lingvističke studije 1968. godine (Sofija Miloradović and Motoki Nomači, eds., *Sećanje na akademika Milku Ivić. Delanje i naučno nasleđe*

(SES 36/Posebna izdanja Instituta za srpski jezik SANU knj. 1), 19–38, 119–158, Beograd: Institut za srpski jezik SANU, 2024) ㊦ 3 著書 ▼ (with Sofija Miloradović) Reč unapred (Sofija Miloradović and Motoki Nomači, eds., *Sećanje na akademika Milku Ivić. Delanje i naučno nasleđe*, 175 (Beograd: Institut za srpski jezik SANU, 2024) ㊦ 5 学会報告・学術講演 ▼ (with Robert Greenberg) The Concept of Language Affirmation and the Emergence of New Languages Evidence from the Balkans, The 23rd Biennial Conference on Balkan and South Slavic Linguistics, Literature and Folklore, University of Mississippi (2024.5.3) ▼ (with Robert Greenberg) The Concept of Language Affirmation and the Emergence of New Languages: Evidence from the Balkans, The 21st International Congress of Linguists, Adam Mickiewicz University in Poznań (2024.9.8) ▼ Contested Registers in Serbian in the Late 18th and Early 19th Centuries: The Case of Avram Mrazović, SRC 2024 Winter International Symposium “Languages, Nations and Standardization in Slavia: So Similar and Yet So Different,” SRC (2024.12.19) ▼ 「18 世紀末～19 世紀初頭のセルビア語における複数言語形式使用を巡る戦略。アブラム・ムラゾビッチの場合」日本 18 世紀ロシア研究会 2024 年度研究発表会、明治大学 (2024.9.21)

服部倫卓 ㊦ 1 学術論文 ▼ロシアのウクライナ侵攻を受け中欧班列に生じた異変『比較経済研究』62: 21–30 (2025) ▼ダイヤモンド：制裁で交錯するグローバルとローカル (田畑伸一郎編著『ロシア北極域経済の変動—サハ共和国の資源・環境・社会 (スラブ・ユーラシア叢書 17)』(119–139, 北海道大学出版会, 2025) ㊦ 2 その他業績 (論文形式) (1) 総説・解説・評論等 ▼対露制裁に見るアメリカの「正義」と「実益」：ロシア産水産物の輸入をめぐる『Foresight』(2024.4.16) ▼ロシアの“ゾンビ戦車”が戦場へ 質よりも量を優先、戦車供給から見るプーチン・ロシアの今『Wedge ONLINE』(2024.4.19) ▼経済の脱ロシア依存を進めるモルドバ『ロシア NIS 調査月報』6: 18–27 (2024) ▼【現地ルポ】ウクライナの次はモルドバ？ 平和に見えても、所々に潜む亀裂、現地から見た小国モルドバの“今”『Wedge ONLINE』(2024.5.28) ▼ロシアという大いなる謎をシベリア・極東から読み解く『じんぶん堂』(2024.6.14) ▼【インドの銀行に死蔵？】ロシアが石油を輸出しても収入は懐に入らず、戦費調達へなされたスキーム『Wedge ONLINE』(2024.7.26) ▼「敵国研究」の原点に戻ったロシア研究『學士會会報』967: 9–13 (2024) ▼【中国—欧州の物流に変化】ウクライナ戦争、紅海危機で動く中欧班列の現在地『Wedge ONLINE』(2024.10.17) ▼ロシア・ウクライナ産業紀行：ありし日の情景をめぐる『地歴・公民科資料 ChiReKo』2: 10–13 (2024) ▼【“幻の”貿易統計集からロシア貿易を検証】制裁の影響は？中国・インド・トルコへ傾斜で生まれた痛手『Wedge ONLINE』(2024.11.19) ▼地政学の谷間、モルドバの苦悩：「親 EU 路線」は在外票依存、大統領選にロシアが介入『Foresight』(2024.11.20) ▼ロシア経済はダウン寸前か？「ルーブル急落」の背景、国庫を潤す側面あるも、規律崩壊の懸念『Wedge ONLINE』(2024.12.10) ▼「弾圧のベルトコンベア」で抑圧するルカシェンコ それでも国民がベラルーシに住む理由『Wedge ONLINE』(2025.2.8) ▼ロシア・ウクライナ戦争を奇貨に生き延びたベラルーシの独裁者ルカシェンコ『Foresight』(2024.2.12) ▼火事場泥棒トランプが狙うウクライナのレアアース、ゼレンスキー訪米で協定でも、噂の資源はどこまで有望か『Wedge ONLINE』(2025..2.27) ▼独裁が長期化するベラルーシの経済・産業模様『ロシア NIS 調査月報』4: 42–51 (2025) (5) その他 ▼ロシア・ウクライナ・ベラルーシ・モルドバ (一般社団法人中国研究所編『中国年鑑』136–138, 明石書店,

2024) ▼ EU と敵対するルカシェンコ体制のベラルーシ；ウクライナから EU に向かう移民・避難民；ベラルーシの移民・難民と同国を経由する中東難民（羽場久美子ほか編著『EU 百科事典』, 218-219, 340-341, 342-343, 丸善出版, 2024) ▼（インタビュー）黒海航行「合意」露、米の顔立て『毎日新聞』（2025.3.27） ③ 著書 ▼（吉田睦との共編著）『ロシア極東・シベリアを知るための 70 章』 380（明石書店, 2024） ⑤ 学会報告・学術講演 ▼ロシアのウクライナ侵攻を受け中欧班列に生じた異変, 比較経済体制学会, 大阪経済大学（2024.6.29） ▼ How Far Has Russia's 'Turn to the East' Advanced?: Reality as Indicated by Russian Merchandise Trade Statistics, 55th Annual Convention of Association for Slavic, East European and Eurasian Studies (ASEEES), Boston（2024.11.23）

藤本健太郎 ① 学術論文 ▼ 中東鉄道売却と一九三〇年代前半におけるソ連の対日外交『東アジア近代史』 28: 42-60 (2024) ② その他業績（論文形式）(2) 研究ノート等 ▼ 小樽の歴史をどのように記述するか：『小樽学』を出発点として『小樽商科大学 人文研究』 148: 151-164 (2024) ⑤ 学会報告・学術講演 ▼ The Achievements and Limitations of the Puppet Buffer State: The Diplomacy of the Far Eastern Republic toward Japan, 12th East Asian Conference on Slavic Eurasian Studies, Hanyang University (2024.6.28)

松本祐生子 ② その他業績（論文形式）(5) その他 ▼ 個人研究助成研究報告書 ロシア＝ウクライナ戦争とフェミニスト運動『ジェンダー研究』 27:191-193 (2025) ⑤ 学会報告・学術講演 ▼ ソ連の都市裁判からみる独ソ戦, 第 74 回日本西洋史学会大会, 東京外国語大学 (2024.5.19) ▼ サイエンストーク「レニングラード包囲と戦後期の女性」, 第 66 回北大祭・施設一般公開「過去の記憶と現在 (いま) : スラブ・ユーラシア」, SRC (2024.6.8) ▼ Chinese Children in the “Great Patriotic War”, 12th East Asian Conference on Slavic Eurasian Studies, Hanyang University (2024.6.29) ▼ ロシア＝ウクライナ戦争とフェミニスト運動, 公益財団法人東海ジェンダー研究所個人助成受託者報告会, 東海ジェンダー研究所 (2024.7.6) ▼ ソ連・ロシア政治のマスキュリニティ：キーロフの表象からみる, 早稲田ロシア東欧研究所研究会, オンライン (2024.10.31) ▼ レニングラードの政治と戦争：1929 年～ 1957 年, 北海道スラブ研究会 (2024.11.26) ▼ 戦争における越境とジェンダー, 東ユーラシア研究プロジェクト (EES) 2024 年度全体集会, SRC (2025.1.25)

村上勇介 ① 学術論文 ▼ (coautoría con Joseph Pozsgai-Alvarez) Un análisis de la democracia peruana durante la crisis política, Elecciones, 23 (27): 105-134 (2024) ▼ 日本の自主外交の現れ? : フジモリの憲法停止措置 (1992 年) に対する日本の姿勢をめぐって『イベロアメリカ研究』 46(特集号): 23-41 (2024) ▼ 真珠湾攻撃とペルー：リベラ公使による警告の神話『イベロアメリカ研究』 46(特集号): 43-45 (2024) ▼ 2020 年代ラテンアメリカの政治と国際関係の現状と今後『世界経済評論』 69(2): 42-51(2025) ② その他業績（論文形式）(5) その他 ▼ 二十一世紀ラテンアメリカにおける米中の覇権対立『修親』 779: 10-13 ▼ (谷浩之、岸川毅と) 第 46 巻特集号の発刊に寄せて『イベロアメリカ研究』 46: i-v (2024) ▼ 中南米のポピュリズム (日本比較政治学会編『比較政治学事典』 166-167, 丸善出版, 2025) ⑤ 学会報告・学術講演 ▼ サンマルティン州の概要；ペルー・サンマルティン州の政治社会変動：1980 年以降の変動；日本における (ラテンアメリカ) 地域研究の盛

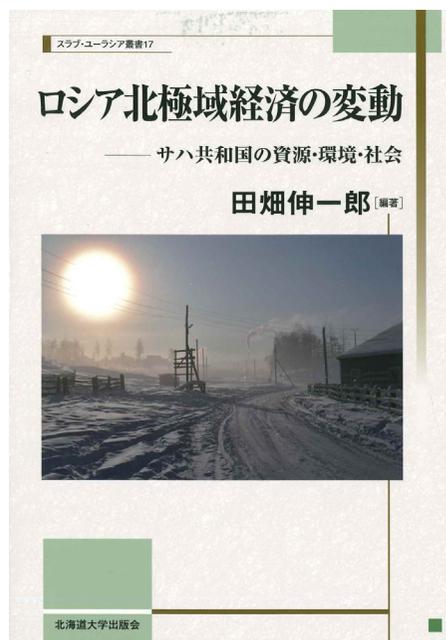
衰：1990年代以降の学術行政との関係から，第61回ラテン・アメリカ政経学会，龍谷大学（2024.11.9）

山脇大 Ⅰ 1 学術論文 ▼ (with Kei Nakagawa and Kaito Takano) Determinants of Natural Capital: An Empirical Study By Income, Regional and Temporal Differences, SSRN: 1–36 (2024) ▼ 環境投資と情報開示：ロシアにおける現状と課題の考察『ロシア・東欧研究』52: 1–18 (2023) Ⅱ 2 その他業績（論文形式）(1) 総説・解説・評論等 ▼ 脱酸素に向けたロシアの森林資源のポテンシャル『ロシアNIS調査月報』4: 30–41 (2025) (5) その他 ▼ (with Kaito Takano and Kei Nakagawa) Does Executive Compensation with ESG Target Improve Firm's ESG Performance?: Evidence from Japan, Applied Informatics in Finance and Economics (AIFE), 16th IIAI International Congress on Advanced Applied Informatics, Kagawa (2024.7.6) ▼ ロシア金融市場のグリーン化：中央銀行と暗号資産に焦点を当てて，SRC 生存戦略研究セミナー（ロシアの環境・脱炭素政策の新たな様相），オンライン (2024.11.12) ▼ (野中賢也，田村光太郎 高野海斗，中川慧と) 取締役推薦理由文を用いた取締役のスキル・マトリックス分類モデルの開発，第31回言語処理学会，長崎 (2025.3.12)

## みせらねあ

### 『ロシア北極域経済の変動』の刊行

「スラブ・ユーラシア叢書」第17巻として、『ロシア北極域経済の変動：サハ共和国の資源・環境・社会』が3月に北海道大学出版会から刊行されました。センターでは、北極域研究加速プロジェクト（ArCS II）の社会文化課題に含まれるサブ課題「エネルギー資源開発と地域経済」を2020～2024年度に実施してきましたが、本書は、この研究の成果をまとめたものです。このサブ課題では、ロシア北極域において資源開発がどのように進められているのか、それが北極域の経済・社会にどのような影響を及ぼしているのかについて、サハを事例として研究を進めました。この5年間、コロナ感染症とロシアのウクライナ侵攻により、予定していたロシアでの現地調査は全く行うことができなかったのですが、現地の研究者との密接な協力により、本書の刊行に漕ぎ着けました。内容は以下の通りです。[田畑]



## 第1部 産業と財政

第1章 産業構造：強まる石油・ガス依存 田畑伸一郎

第2章 財政：ベネフィット・シェアリングの観点から 横川和穂、田畑伸一郎

第3章 農業：国による支援とその行方 後藤正憲、ガリーナ・ダヤーノワ

## 第2部 資源とエネルギー

第4章 石油・ガス開発：拡大する生産と莫大なポテンシャル 原田大輔

第5章 ダイヤモンド：制裁で交錯するグローバルとローカル 服部倫卓

第6章 再生可能エネルギー：「脱炭素レース」の現在地 徳永昌弘

## 第3部 家計と健康

第7章 家計と食：気候変動の影響 成田大樹、ショフルフ・ハサノフ、山田大地、ワルワラ・パリロワ、トゥヤラ・ガヴリエワ、ホルヘ・ガルシア・モリノス、ステイーヴ・サカバジ

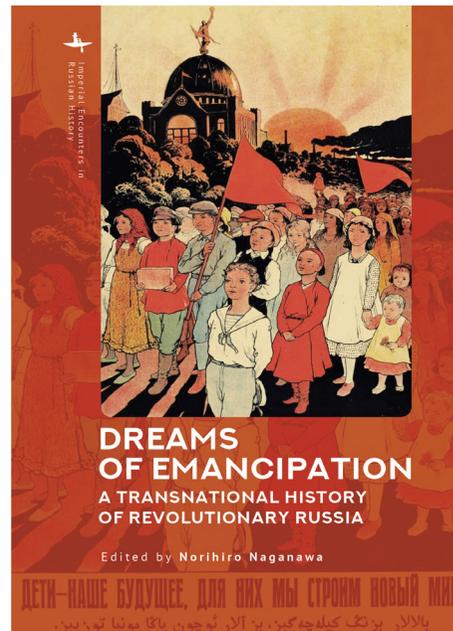
第8章 健康：気候変動と資源開発の影響 武田友加

第9章 住宅：政策、市場、現状 道上真有、トゥヤラ・ガヴリエワ、アルチョム・ノヴィコフ

## 論集 *Dreams of Emancipation: A Transnational History of Revolutionary Russia* の出版

ロシアがウクライナを侵略する今、なぜロシアから発せられた解放のメッセージが重要なのでしょうか。本書は、多言語史料を駆使して、1917年の革命が万華鏡のような反響を生み出したロシアの多民族社会と国境地帯の役割を取り上げています。また本書は、ソ連の現存した共産主義体制が周辺諸国との相互作用の中で生成された動態を捉えています。本書は、ロシア帝国の崩壊が、国境地帯やそれを越える地域において、ポリシェヴィズムに決して限定されない多彩な解放の夢と構想をいかに噴出させたのか、そしてソ連が、今日の世界政治に影響を落とす長い20世紀において、深刻な矛盾をはらみつつ、いかに多様な解放のインスピレーションの源泉となってきたかを描いています。

ボストンに本拠のある Academic Studies Press より今般上梓された本論集の構想は、2017年にロシア革命100周年に合わせて開催したセンターの冬期国際シンポジウムに遡ります。論集にまでお付き合いいただいたのは三名に限られますが、編纂の過程でロシア革命とその20世紀における意味を東欧、中東、中国から考えるという論集の趣旨に賛同し、その凝集



性を高める努力をしていただける執筆者に巡り合えたのは大変光栄でした。そして、分野を代表する傑出した歴史家である Michael Reynolds, Artemy Kalinovsky, Willard Sunderland 各氏が、裏表紙に推薦文を寄せてくれたのは存外の喜びです。個人が購入するには大変高すぎる価格になっておりますが、皆様の身近な図書館に入れていただけますと幸甚です。[長縄]

Introduction: Russia's Empire and Emancipation Dreams in the Long Twentieth Century

Norihiro Naganawa

1. Occupation as Liberation: The 1917 Experience in Russia's Occupied Territories (Ottoman Eastern Anatolia and Austrian Galicia)

Peter Holquist

2. Regionalism and Federalism in the Revolutionary Caucasus

Sarah Slye

3. Revolution from Abroad: Siberian Regionalists and the Struggle for the Russian State

David Rainbow

4. The Warlord as Liberator: "Rights Recovery" and the Revolution in Harbin

Yuexin Rachel Lin

5. Making an Anti-Imperialist Empire: The Soviets' Entanglements with Central Asia, Iran, and the Red Sea in the 1920s

Norihiro Naganawa

6. A Net Balance? Soviet-Turkish Economic Relations in the Interwar Period

Samuel J. Hirst

7. Poland, Ukraine, and the Limits of Socialist Friendship: How a Polish Diplomat Tried and Failed to Overcome Ethnic Rifts in the Soviet Bloc, 1944–65

Zbigniew Wojnowski

8. Rediscovering Lenin, Reinventing the Collective: Revolutionary Ideals in Post-Stalinist and Post-Maoist Transitions

Martin Wagner

Afterword

Adeeb Khalid

## センターの役割分担

2025年度のセンター教員の役割分担は以下の通りです。[長縄・編集部]

センター長	長縄
副センター長	仙石・ウルフ
拠点運営委員会委員	岩下・宇山・青島・ 長縄・野町
【学内委員会等】	
教育研究評議会、部局長等連絡会議、部局長等意見交換会	長縄

教務委員会	長縄
創成研究機構運営委員会	長縄
図書館委員会	青島
国際担当教員	ウルフ
NJE3 学内運営委員会およびカリキュラム検討専門委員会	安達・仙石
低温科学研究所拠点運営委員会	長縄
北極域研究センター運営委員会	服部
総合博物館運営委員会	仙石
ダイバーシティ・インクルージョン推進員	宇山
社会科学実験研究センター運営委員会	服部
サステナブルキャンパス推進員	野町
ハラスメント予防推進員	岩下
広報担当者	宇山
共同利用・共同研究拠点アライアンス運営委員	長縄
アイヌ・先住民研究センター運営委員	岩下
情報公開・個人情報保護審査委員会委員	仙石
情報基盤センター共同利用・共同研究委員会委員、 システム専門委員会委員	安達
<b>【学外委員会等】</b>	
国立大学附置研究所・センター会議	長縄
国立大学共同利用・共同研究拠点協議会	長縄
JCREES 事務局	長縄・生存戦略助教
JCREES サマースクール	仙石・服部
地域研究コンソーシアム理事	長縄
地域研究コンソーシアム運営委員	仙石・諫早
東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所拠点運営委員	岩下
ICCEES 情報	青島
<b>【センター内部の分担】</b>	
大学院講座主任	仙石
教務委員	岩下
入試委員	宇山
総合特別演習担当	(前期) 青島 (後期) 服部
全学教育科目責任者	岩下
全学教育科目総合講義	仙石
全学教育科目演習	岩下
文学部授業	野町
国際科目	ウルフ
将来構想	長縄・宇山・仙石・ 野町・青島
点検評価	長縄・宇山・岩下・田宮
夏期シンポジウム	青島・生存戦略助教・EES 助教・ EES 非常勤研究員・非常勤研 究員
10月UMass とのワークショップ	長縄・生存戦略助教・EES 助教・ EES 非常勤研究員・非常勤研 究員
冬期シンポジウム	宇山・生存戦略都センター助 教・非常勤研究員 (EES 助教・ EES 非常勤研究員)
EES 全体会議	岩下・EES 助教・EES 非常勤研 究員 (非常勤研究員)

2月生存戦略全体集会	長縄・生存戦略助教・非常勤 研究員 (EES 助教・EES 非常勤 研究員)
図書	兔内・野町
情報・メルマガ	宇山・非常勤研究員
広報	服部・田宮
予算	服部
共同利用・共同研究公募	仙石
客員教員	服部
Pavel Shabley	長縄
Kirill Postoutenko	安達
Aaron Cohen	ウルフ
内田 州	服部
金 成浩	岩下
塩谷 昌史	宇山
外国人研究員プログラム	安達・ウルフ・田宮
Nicola Di Cosmo	諫早
Una Aleksandra Bērziņa-Čerenkova	岩下
Edin Hajdarasic	野町
Samuel John Hirst	長縄
Julie Anne Cassidy	安達
Olena Palko	青島
Aksana Ismailbekova	宇山
非常勤研究員	野町
中村・鈴川基金	仙石
百瀬基金	岩下
公開講座	宇山 (・非常勤研究員)
公開講演会	野町
専任研究員セミナー (助教・非常勤研究員セミナーを含む)	安達
その他研究会・講演会	安達・非常勤研究員・田宮
クロスアポイントメント教員 (人事対応)	岩下
共共拠点三研究所・センター交流 (東南アジア研・AA 研)	岩下・宇山
ウクライナ研究ユニット	青島
生存戦略研究ユニット	長縄・岩下
研究所一般公開	助教 2 名、非常勤研究員
博物館展示	仙石
NIHU 東ユーラシア (NIHU セミナー、HP、オンライン報告書)	岩下
UBRJ (HP、『境界研究』)	岩下
その他諸行事企画	助教・非常勤研究員
雑誌編集委員会	安達・諫早・ウルフ・ 仙石・青島
Acta Slavica Iaponica	諫早・安達・ウルフ・田宮
『スラヴ研究』	青島・田宮
スラブ・ユーラシア叢書, SES, 研究報告集	安達
ニューズレター和文	宇山・田宮 (・長縄)
ニューズレター欧文	ウルフ・田宮 (・長縄)

## 専任研究員消息

服部倫卓研究員は、1/21-1/25の間、現地調査のため、タシケント（ウズベキスタン）に出張。

長縄宣博研究員は、2/8-2/23の間、資料収集のため、バクー（アゼルバイジャン）に出張。

青島陽子研究員は、2/22-3/6の間、資料収集のため、タルトゥ（エストニア）、ヘルシンキ（フィンランド）に出張。

宇山智彦研究員は、3/4-3/9の間、有識者会議「中央アジア+日本：現在の傾向と展望」への参加、研究打ち合わせのため、アルマトゥ、アスタナ（カザフスタン）に出張。

野町素己研究員は、3/6-3/17の間、資料収集のため、タルトゥ（エストニア）に出張。

[事務係]

## 目 次

研究の最前線	1
2025年度夏期シンポジウム開催予告／ミルラン・ベクトウルスノフ特任助教が <i>Ab Imperio</i> 最優秀論文賞を受賞／生存戦略研究「帝国の世界秩序とその後を考える北大・UMAシンポジウム」を開催／2025年度北海道大学－メルボルン大学合同研究ワークショップファンド採択／日米緊急対話「トランプ復活とロシア・ウクライナの行方」の開催／特別連続セミナー「2.24から3年を経たスラブ・ユーラシア世界」の開催／人間文化研究機構グローバル地域研究推進事業東ユーラシア研究プロジェクト（EES）2024年度全体集会開催報告／NPI/SRC 共催シンポジウム「4年目を迎えるようとしているウクライナ戦争とロシア・旧ソ連諸国」開催される／共同研究員／専任・助教・非常勤研究員セミナー／研究会活動	
人事の動き	18
研究員・事務職員の異動／2025年度の客員教授・准教授	
外川継男先生とSRC	20
by 望月 哲男	
外川継男先生を偲んで	22
by 栗生澤 猛夫	
大津定美先生のご逝去	27
by 田畑 伸一郎	
学界短信	28
科研研究会「『14世紀の危機』についての文理協働研究」報告記／学会カレンダー	
大学院修了者の声	33
社会人院生的「スラ研のすすめ」のような何か by 新井 洋史	
編集室だより	35
<i>Acta Slavica Iaponica</i>	
会議	36
センター協議員会	
誰が何をどこで	37
みせらねあ	44
『ロシア北極域経済の変動』の刊行／論集 <i>Dreams of Emancipation: A Transnational History of Revolutionary Russia</i> の出版／センターの役割分担／専任研究員消息	

---

2025年5月8日発行

編集	田宮彩也香、宇山智彦
発行者	長縄宣博
発行所	北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター 060-0809 札幌市北区北9条西7丁目 Tel.011-706-2388、706-3156 Fax.011-706-4952 インターネットホームページ： <a href="http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/">http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/</a>

---